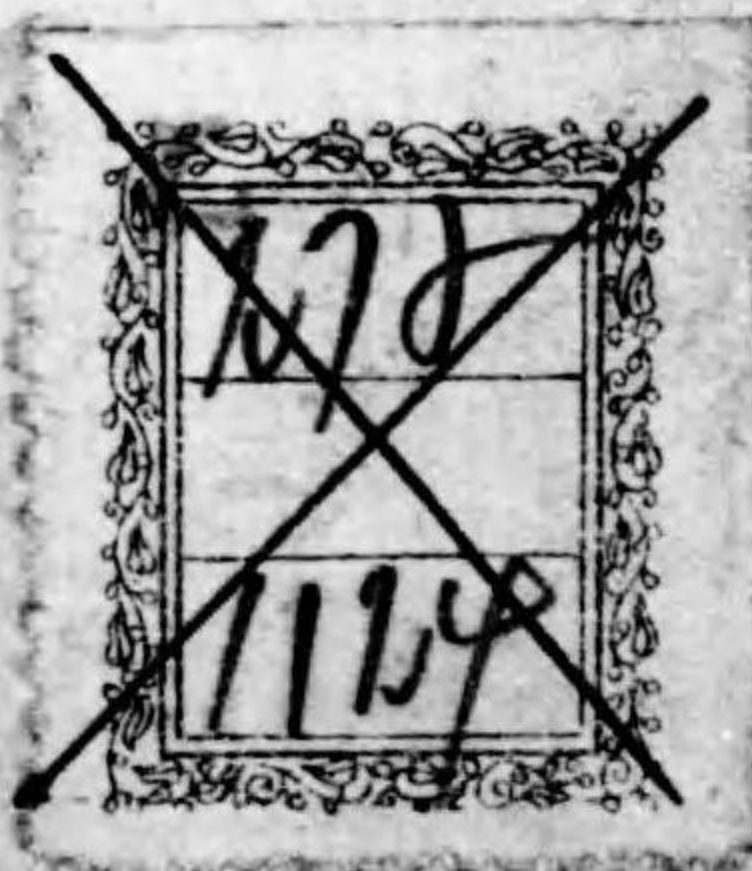


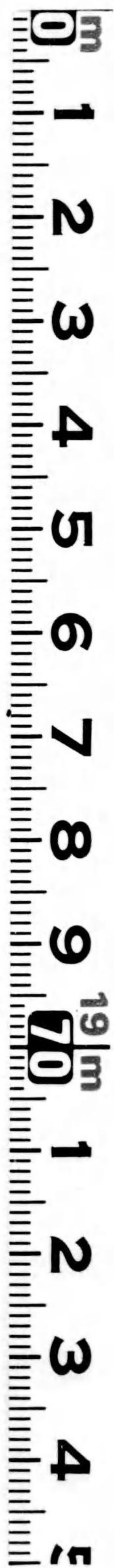


戀  
愛  
情  
話

附  
須  
磨  
仇  
浪



特



始





持100

387



愛  
情  
話

附錄  
(須磨沖悲劇)

大正  
9.13  
内交



序

戀こひに賢けん愚ぐなく貧ひん富ふなく階かい級きゅうなく人ひとは悉ことごとくく戀こひの動どう物ぶつにして、いかなる人ひと間まも一度いちどは必ず戀こひせざる者ものなく、甚はなはだしきは生涯せうがいこの戀こひの奴やつことなりて終はる。

この戀こひを筆ふでにせず口くちにもせず、この戀こひを以もつて世間せけんの人ひとに對たいし、その人ひとの眞ま面目めいなる顔かほを見みれば、自然しぜんに一種しゆの滑稽こつげいを禁きんじ得えずして、思おもはず吹ふき出だすことあり。

いかめしき麗ひげつら面ら、すさまじき大おほ面づら、さも分ぶん別べつらしき仔し細さい顔がほ、さも律りつぎ義ぎらしき正せい直ちき顔がほ、君子くんしめいたる容やう貌ぼう、學者がくしやらしき風ふう采さい、教育家けういくかきんげんの謹きん嚴げん、宗教家しうけうかの冷れい靜せい、會社員かいしゃんの忠ちゆう實じつ、官吏かんりの精せい勤きん、その他たいづれも油ゆ斷だんなく



緊張せる目鼻を押し並べて、我劣らしき大に澄まし込めど、身分相應で  
 れんくの戀に憧れいち／＼、これか一度や二度は女の尻を追ひ廻せし嫌  
 な奴がと思ひば、凡て人間ほど内外表裏のあるものなし。  
 我はこの千差万別なる點に於て最も戀の力の偉大なるを認む。  
 如山君の戀愛ローマンス！」聚むる所は皆是れ、現代の半面、戀の  
 万態を繪きたる一幅のパノラマなり、蓋し、本書に依りて共鳴の懐し  
 さを眞に解するを得べきを信するものなり。

上野の森影の宮にて

瓢綠生識

目次

須磨の仇浪	………	一
徳比草	……… (徳富健次郎)	三六
青春	……… (小栗風葉)	六〇
暑中休暇	………	六七
湯島詣	……… (泉鏡花)	八三
瓦斯の光り	………	九四
心意氣	……… (如水生)	一〇三



浮世 浪 戀 愛 情 話

附 録 (須 磨 沖 悲 劇)

◎ 須 磨 の 仇 浪

人の親の心は闇にはあらねども子を思ふ故に迷ひぬるかな。  
あさましき次第とも思ほえて、はづかしさ限りなう筆もつ手も  
にぶり勝には候へども、世の人のいましめともなれば何よりも  
うれしう、只そをのみ思ひ記し上参らせ候。

目 次 (終)

■ 文	が	ら	.....	二五
■ 戀	さ	、	や	き
	.....	.....	.....	二四
■ 脚 本	金 色 夜 叉	.....	(尾崎紅葉作)	.....
	.....	.....	(小栗風葉脚色)	.....
	.....	.....	.....	一四九
■ 朋 子 と 要 吉	.....	.....	(森田草平)	.....
	.....	.....	.....	一七六
■ 途 す が	ら	.....	(水上龍太郎)	.....
	.....	.....	.....	二〇一



大空にたづ舞ひて外ふく風もよごを奏じ居り候ひき、其年も暮れなんとする四日に、かしづくまでのしるしにとて結納の運ばれて、内も外も今日の目出度さを限りなうよろこび居り候定まれば其の日より兩親の心配はたどふるに物もなふ、あれよこれよと、よの目も寝ねたまはずに、晴れの日 of 用意をのみ急がれ申候、年移り月變りて草木も芽出す春二月、二度と再びまたがぬしきるをつひに踏み越え、兩親に連れられ舞子なる式場にと車を走らせ申候、……高砂や尾のえの松……四海波しづかにして枝もならさぬ時津風……らふそくのかげゆらめきて金屏

風に影をうつせばあまき風の漂ひて口を濡す酒の香も此上なきやうに、覺えて眉深に冠りし綿帽子に赤き面の色や寫ると耻かしくのみ思ひ申候、連れられ來りし家は實家と變はらぬ廣やかなる住居に候、親類廻りよ衣裳見せよと、世のならはしにもれず樂しき嬉しき數日は夢と過ぎ申候。里の遠ければとて親しき家に里歸りも致さず一緒に來給ひし兩親の歸らるれば遠き此島に頼る人は一人も無ふ只々良人のみ柱とも杖とも思ひ居り候ひき。風俗習慣の異なる地に來て經驗淺き身には何事も涙を誘ひ申



候、日も經ち月も代はれば少しは家人の氣風も判り、判れば判る程悲しき事のみ多く袖の乾きし時も無う、一日新婚旅行をせんとこのたまへしかご妾は好き返事も出來ず、只考へさせてと答ふれば「お前は私と旅行をするのが厭か！」と噫、如何なる方にも縁ありて嫁けば嫌ひで嫌ひ通さる、手にもあらねば、露おろそかに致さねど一生一度の晴の旅とは云へ常々金錢にかけては目も鼻も無き母上の、義理に迫られて、一時許るさるることもこは後には屹度禍を作る基と思はれて何事も末のみ樂まんとて返答も怠り勝に御座候ひき何事も秘めぬ良人とはいへ是のみ申上

けられず旅行の咄しの出でし時は努めて話頭を轉じ候へば「お前は冷かな女ぢや愛情のない女ぢや」と良人は常に申し候ひき二人親しう話せば母上の氣に召さず、母上の御機嫌好き時は背の君には愛なき女よと罵らる、廿歳とは云へ世の風に吹かれし事も無き身には何事も判らず、頼りてお教へ受けん方もあう遠き海のかなたをながめては泣き入り申候、花咲き鳥うたひて世もやうく春めき、或る日、御先祖の御法事ごとさせたまふよしにて色々の人出入居り候ひき、如何致せしや、料理人の少しおくれしかば、一休みせむとて手傳の方々と一緒にお茶な



ど入れていこひ居りし時、諸云となしに雙六のはなし出で、こ  
まなど運びて皆々打興し居り候。

私にもせよとて弟と相對し、今や酣になりし時、例のふすま  
のあら／＼しく開きて、背の君には入らせたまひ『このいそが  
しいのに何をして居るのじや!!』と云はるゝと共に背をば強く  
うたれ候……噫、萬事休し申候。大からねど郡中一の素封家と  
して實家は世に時めき居り申候、優しき兩親にはぐくまれ、十  
人の召し使にかしづかれて、右の物も左にせぬ來し方廿年……  
習慣は第二の天性とか、いづくの家に行くとも皆我家のごとき

事のみと思ひ居りしに……噫、はじめて目ざめ申し候、目ざめ  
し事の早かりしだけ夫を恨み候よ、わけを話せば背の君も満足  
したまひしならん、されどト嫁して一月餘にもならぬ我妻を  
人の眼前にてたゝくとは……こらへむとすればする程涙のわき  
出で候、悲しとも悲しう候ひき、産みの兩親にてもうたれし事  
なきこのからだを、夫とは二へ義理ある仲……くひしぱりし唇  
のきるゝ心地致し候、されどト妾は皆この身の至らぬ故とわ  
びて許るされ申候、國の兩親には何事も申上げず……日記は  
後に残りてよき物とて日々の事どもより、折にふれて感じ、事



など記しおり候、夜も十時に入りてより記す事とてつかれし身  
 には筆もつ事も大儀にて、文もまとまらずあやうき言葉のみ候  
 ひき、人に見られてはと知られぬ處にしまひ置きしに「某とは  
 誰の事ぢや、この八はまだお前に未練があるか？」と見たまひ  
 し日記の邪推ならむと、色々辯解してこも済みがたもなふ消え  
 申候、されどよく事情をしりたまうぞ折にふれては冷淡ぢや愛  
 があひ、とそれのみ申され居り候ひき、黒がねをもやきつくす  
 夏の一日、背の君には弟の方御病氣とて、草津なる温泉に見  
 まはれ、御不在なりし時、何故かしらねど御消息は皆私の名宛

によこされ申候『〇〇〇は、私かたのむで見舞に行つたのだ、  
 親にあて、弟の病状もしらさず、妻にばかり手紙をよこす、  
 息子の嫁の来ないうちは、あんなでもなかつたに、全く心が變  
 つてしまった』と母上はのたまひ申候、夫の御心の程はしらね  
 ば一度母上に御消息御通知あればよからむにとそれのみ待たれ  
 すぎしが、そもかひなう暮れ行き申候、背の君御留守ともなら  
 ば、母上等の御しかたもいよ／＼きびしう、あまつさへ他家へ  
 かたづきたまひし姉上の歸り來られて、共に足をそろはせたま  
 ひぬ、實家より持參せし鉄の紛失せしかば、探し居りしに、母



上の聞かせ給ひてか『鉄の一ちやうなんか失つたつて、さう探さなくてもよいぢやないか、そんなにおいしい鉄なら、百でも千でも買つてやるに』と母上は申され候、國の兩親はやさしければ、口小言などのたまひしことも候はねば、少しのお小言もよけいにひゞきて、こよなう悲しう候ひき、四五日経し或る日、妾の硯箱を見たまひし時、ナイフの中味の紛失してサヤのみなりしかば『なせ中味を失ふたの？をしい事をしたね、すぐさがせばよかつたに』と噫知らざりき、數日すぎて此日このお言葉  
を聞かむとは、……探せばしかられ、探さればお小言をたま

ふを……人の心の底の見える鏡のなきをうらみ申候、食事の世話は妾に任すると、母は夫の前にてちかはれ申候、されば出來ぬながらも、學校に學びしノートひもとき、苦心致し居り申候夫の御留守の着物をしたておかむと、いそぎ針をはこび居り候ひき、最早十一時に間も無し、いざ食事の用意を致さむと、手を休めし時に『○○さん、御飯よ』と姉上は申されし、妾のこしらえ方がおそかりしよと、姉上に御禮申上、箸取りたれど、母上のお目は期せずして我上に置かれぬこのたびは何にて妾が御用意をせむとつとむればつとむるほど、心ありてか、いつも妾



はおくれ申候、急げば急ぐ程おくれ勝にて、終には夕飯を四時  
 しいたゞきし時も候ひき、冬なればしらぬこと、日足長さ夏の  
 日のこととて八時にてもあかるきに、四時に食事をしまふ家の  
 他に候ふや、あまりのなされ方に涙も出でず候ひき、夕方とも  
 成り、たそがれもわかたぬまでふけし時、打連れて濱邊に遊び  
 し時、山國にそだちし事あれば、貝拾ふ事の珍らしうて、何事  
 も打わすれて進みし進み申候、ふとおもひて後ふりかへれば、  
 母上はゐたまはず、噫不注意なりし、知らざりき、急ぎ歸れば  
 『自分ばかり先き行つて、親を親とも思はずに後に放つて置い

て、あまりの事に先へ歸つて來た』と辛きすきもわきまえし身  
 あれば、氣もつきし事なれど、世の人は皆妾のごとき心の方よ  
 と思ひ居りし事とて、おもしろさにまざるゝともなうまざれし  
 に、あまりのむごきお言葉よと思はれ申候、半月のお旅もお恙  
 もなう歸りませし背の君を、なしにて母上は語りたまひぬ『嫁  
 は食事の世話もせず、自分の着物ばかり縫つて居つた、そして  
 親元へは悪口を手紙で知らせ、その手紙も私が下女の手から取  
 るかと思つて、夜の戸じまりも自分でじた』と噫、後に至りて  
 この落し穴のあらうとは……それほど深きお心とは露しらざり



しこの身がおろかなりしよ、姉上も姉上ぢやと胸つぶれ申候、  
 妾の着物もこの家で縫へば御氣を悪うあそばす事とて、それよ  
 りは實家に送り居りしに、又母上はのたまひぬ『そんなにいっ  
 も實家で裁縫も洗濯もしてもらつては、近所の人がこの母がき  
 びしい様に思ふし、又其上に一二枚はそのまゝ置いて取つてし  
 まふかもわからぬ』と金錢に目の無き母上なれば、他の人も皆  
 自分の様なものよとおぼしめしての仰せと思はれ候へ共、實家  
 は郡中の篤志家なれば名譽もほこりも候はむ、着物とはいへ常  
 着の銘仙一二枚取ればとてはした金目にてもなし取らでも差し

つかへなごなき自分なるに、いやしきお心よとあまりの事にを  
 かしう候ひき。

勤儉なして貯蓄せし金なれば、うれしう候へども、りんしよ  
 くをして、たくはへし金錢はいやしきものゝ一に御座候、嫁し  
 來りし家は、内はせいたくにして外へはしぶり申候、財産のあ  
 ればあるだけ、身分相應に貧民にほごせば又なつき申候、入  
 るゝにしげくして出すにをしむ者は、世よりつまはじさせらる  
 ゝものに御座候、里方よりは此身の可愛さに、何事も先方の云  
 ふ通りに致せし折、參荷の荷物の外に着物も羽織も流行を逐ふ



て送り來り申候、やれ初節句ちやとては、この町にて珍しき程  
 よき雛を持參致し候、されどく、里方の小言のみ申され候ひき  
 慾に目のなき方なりければ……悲しき事の數重ねるにこらへに  
 こらへし身には、氣も狂せむ様思はれて、不安にかられ候ひて  
 病氣になりては一大事と、嫁し來りし時の心も捨て、つひに  
 實家の母にこのことを告げまゐらせ候、手ぬかりしか神のしは  
 ざかは知らねども、この手紙を母上は讀みたまひぬ、知らぬ事  
 とて其まゝかきつゞけ下女にもたせて投函致し候、其夕母上は  
 妾にむかれて御ことを申され候、あやまりは妾にある事故、

皆あやまり申候、されど妾が下女に投函致させしに、午後日ま  
 だ多き頃なりしに、何故かん遠ひ遊ばせしか妾が下女をおひ出  
 して母上の出たまはらぬ様戸をしめしとか……母上の讀みたま  
 ひしを知ればしらぬ事、妾は母上の知りませぬ事とのみ思ひ居  
 りしことゝて、戸をしむる要もなし、うたがひほどおそろしき  
 物は是なう候。

或時妾の掃除ををし居りし時、背の君が『○○、これをしま  
 つておけよ』とのたまひしが、返答をなし、其まゝもう是にて  
 掃除もすむことゝて急ぎ帚をはたらかし居りしに、不意に入り



來りたまひて、妾をつきとばしたまひぬ、而してのたまひぬ、  
 『云ひつけた事は早くするものぢや』と……平素のからだなれば、いつものおくせと、あきらめおれど、その時は、妊娠の身なれば子供の事の稻妻の如く頭に囚きて悲しさに袖噛みしめ申候、氣に入らぬとては叩かれ、仕方が悪いとては突き飛ばされ、下層社會の人のする振舞を遊ばされ申候、命を捨て、掛りし愛情のあればこそ何事も忍び申候へ、妾の愛情疑はしくば良人の愛情は石よりも冷ならむと存じ申候、又良人より『暫く煙草を廢すから私の知らぬ所へ藏つて置け』と云はれし煙草を

何心なく藏ひ置きしに其後母上洲本より來給ひて『○○(義弟の事)が姉さんは私の喫ふ煙草迄取上げて了ふた』と云ふてゐた、此家は何に不自由しても食ふ物には不自由さゝぬ方針じやから氣を注げて』と云はれ候、○○さんも餘りに候、母上に告口したまふより此姉に云ふて下さらば煙草は直ぐ出し申すべきに、吁、皆至らぬ身の不幸と存じ候。

『淡路は働く所ぢや働け〜』と云はれ實家にては手も付けざりし水にも觸り申候、時々風呂の拵へなど致し能く此細き身體にて斯くまでもしつる事よと一人驚きし事も有之、餘り母



上の厳しければお産は里方にてせよと云はれし方あり、其用意したるに母上より差し止められ申候、出産の際は實家へ電報走らせ母上産の見舞に參られ五六日も居給ひて室内をブラ／＼致し得るやう相成申候頃安心して歸りましひき、子供の生れてより一層此身の忙がしうて千々に心を遣ひ申し、頃も師走の事なれば迎ふる事の拵へに何れの家も急がれて妾も産後二十日も來らぬに針持ち申候。

氣の張り詰し事とて病氣にもあらで嬉しう好き元旦を迎へ申候へき、其新らしき年桃の花咲く頃はひに里方へと參り申候。

少し健康の勝れねば兩親のすゝめに隨ひて醫師の診察を願ひまれば『淡路に縁付く時とは餘程變つて居る恁麼事では子供の世話さへ出來さうもない暫く養生をして下さい』と云はれき、平素より此身の親體を知る事とて強つての勧めに拒む事もならず暫時足を止め居り候ひき、斯くて一月餘りともなり、良人よりは早く歸れどの手紙參りし事とて兩親も俄かに騒ぎ出し月の三日に歸淡致し申候、從令此身は瘦せて骨と皮とになるとも、愛兒の爲め堪へ忍ばんと決心して……。

愛兒身籠りし夜の夢は今も忘らるれぬもの、一つに候、即ち



何日頃なるかは存せず候へ共廣き美しき道の兩側には處狭きま  
 で櫻の大木生ひ今を最中と美事なる花盛り候、生暖き風も  
 習々と吹きて日は暑からず寒からず、櫻の爲めに日光も仰がれ  
 ぬまで重なり合ひ居り候、又櫻の根本には赤毛布を敷きし茶店  
 の軒をつらね、櫻の梢には金銀の短冊ヒラ／＼と舞ふを美しう  
 思ひ申候、人通も烈しからず淋しからず妾が好みの儘に足を運  
 び申候ひき、此中を肩荷がけにて手には篋を持ち急ぎ足に妾は  
 通り抜け申候、花のトンネルを通り抜けて少しく右に折る、道  
 の候しかば其を曲り見れば門構への嚴めしき宅あり、井を何の

申入れもせで玄關より上り幾間も／＼數知れぬ程通りし奥の間  
 に蒲團を敷き良は臥せ居給ひき、其枕邊に妾は坐はりて前の篋  
 を見せ、澤山ありたれど皆壊れて了ひ一つより無き由話し居る  
 處にて夢は破れ申し候ひき、篋の中には鶏卵の美しきが只一つ  
 のみ有り候ひき、吁、如何なる前非にてありしかは知らざれど  
 ……  
 辛き事も悲しき事も數限り無う思はれ申し候へ共記すも餘り  
 耻しう又我身の素性に現はる、事も候はんと差控え置き申候、  
 知らぬ他人の方にて『お姑様は酷い方ぢや』とか『能う辛抱し



なざる事よ』と申され候ひき、今迄は何事も妾の罪として忍びに忍び居り候ひしかど、吁、されど吁……、此度の事に遭ひて妾の心も狂し申候、父危篤直ぐ來いとの電報に夢かと許り驚かれ取るものも取り敢へず急に急ぎ馳附けて父上の枕邊に侍り真心籠めて看取り參らせしかど命數の盡くる時じや候ひし、泣き叫ぶ子等を後に再び相會ふ事も叶はぬ闇の國へと旅立たれ申候悲しき病室に侍りし數日の事どもお知らせ致すべく筆染め候ひしが是は故ありて他へと送り參らせ候。

假葬も濟まし本葬式も滞りなう村葬とまでされて思ひ残す事

も無之候ひしが妾の家は他にある事とて涙を拭きく淡路にと着し申候ひき『○○國の方はドンナ習慣か知らぬが葬式の時に親類の人に煎餅蒲團を着せ、食事も粗末なものだ』とか『淡路では常に幾程辛い暮らしでも其様な事はせまい』とか、叱言を云はれ候『父様でも今度計りは叱言を云つて居られたから餘程酷い仕方だつたに相違ない』と母上は申されき、去れど此度は葬式も村よりさるゝ事なれば此方より叱言など云はれねば何事も他人まかせと致し居りし由お答へ申上げ候へ共『お前さへ注意をして居れば其麼事も無かつたらうに』と吁父なき子の哀れさ



よ『今度五十日の忌明きに實家へ歸つたらば小使錢は貰へる丈  
 け貰つてお出で、今の内に貰つて置かぬと貰ふ時がないから、  
 叔父様たちが後見をなさると喧ましいから』と母上は妾を一人  
 呼び給ひて夜遅く語られ申し候ひき。

吁堪へに堪へし辛抱も此一言にて半ばより折られし心地致し  
 申候、父なき家には柱も無き事とて云ふ事も露骨になり申候、  
 良人に申上ぐるも母上のお言葉は何事も聞き給ふ方とて相談に  
 ものり給はず、一も二も母上に御同意ある事なれば語るに人も  
 無う又輕々しう他人に相談を掛けらるゝ事にも候はねば考へに

考へ候餘り苦しみの事とて氣も心も狂はしくなりて食事も咽喉  
 を越さず、四日間は絶食して迄熱考致し候、事は金錢問題に候  
 へば、只金錢さへ持參せば母上なり家人も、皆様もお心は平に  
 相成る事は百も承知致し居り候ひしも金の切目は縁の切目とな  
 りて此家を追はるゝ時は父も母も無き身となりて如何に此身体  
 を處置し得る事かと思はれて悲しき極みに候ひき、初  
 めて縁談のありし時、實は荷物は五つほどにし後は金錢にて持  
 參し其利子にて流行の衣裳を求むる様にし度き由云ひ居りしに  
 先方は十三荷を望みしかば父はキツバリ此縁談を斷られしに、



淡路よりは如何に思はれしか母上の態々實家の番頭の宅迄來られ『此方では何事も云はぬから何うか此縁談を纏めてくれ』との相談に實家の父はあの通りの優しき方とて先方が夫程折れて出るなら此方にも強く許りは出られずと末の成行も知らずして遂に縁は結ばれ申候、一度縁付けば妾の肩身も廣きやうにと成る事は何事も聽入れ給ひて……。

吁、其優しき父上は此世に居給はず、御相談申上ぐる方も無し、假介此儘實家に歸り淡路の母上の言の葉を通すればとて叔父上方が此願ひを聽き入れ給はぬ事火を賭るよりも明けく、話

の片も附かずに淡路に歸れば母上のお怒りの程も思はれん空恐しく板挟みと相成りし此身が此儘消え行くの日をのみ待ち居り申候。

金にて繋がれし縁なれば今の中に此家を離るゝ方此の身の爲めの如く思はれて、我身は愛想の盡くる様にと心にも無き行をして離縁せらるゝ日をのみ思ひ居り候ひき、されば妾が餘り食事をせぬを心配し給ひてか實家に歸へる様申され候へば渡りに舟と打喜び荒き浪も我身の行末を祝はぎて打狂ふかと迄に嬉れしく揺られくゝて實家にと歸り申候ひき。



淡路より手紙にて此度の由申し越されし様お叔父上はのたまひしかご妾は其手紙を見ぬ事とて何事も知らで過し居り候へき如何に話の纏りしかお叔父上母君の御注意も聞き八月末つかた又もや淡路にと急ぎ申候、今では我身の行末をのみ案じ愛兒の上にまで心は及ばざりしが一度熱のさむれば此身を犠牲として愛兒の幸福を保たんと決心の臍を固め歸へりしかご……吁去れど……母上や姉上も居給ひて『○○はお前が歸つて來ても家へ入れてはならぬと云ひ何處ともなく出て行つてしまつた』と申されき、今迄の事は皆妾の心得違ひなりしかば詫びて詫びて

許されんと心に誓ひて歸りし此家には良人は居給はず、我身は八裂にさるゝとも厭はねど愛兒の爲めに至幸なる法をば採り下さらば何物にも増して嬉しう候に……ア、過ぎし日何故此身の事のみ思ひて愛兒の行末にまで考へ及ばざりしか、妾生れて二十一年……お育を受けし此身が怨みに候『許してよ、許してよ』と愛兒を抱きて涙に暮れ申候『私は此家を預かつて居るのぢやから私一人の考へで何うする事も出来ない、此家の主人が私に言殘して出て行つたのだから、其言葉を守るより外はない』とて如何に謝罪るとも聽入れ給はず遂に汽船にて追返され申候、



最早此上は神佛を頼むより外に無く、妾の真心の現はるゝ時を頼みて大阪に参り候。

お客としてならば知らぬ事一旦縁附きし上は離縁などなりて實家の閨は跨がぬ覺悟に候へば斯く大阪に参り候、良人に一目遭ひて此胸の裡を語らむと思ひしかど、何處へ行つたか判らぬ故……』とのみの言葉にて残り惜しう思はれ涙に袖の乾く暇も無う愛兒の上を思ひては暗き途を辿る心地致され申候いろくの方の中に入り給ひてお話下され候へしが其驗し見えず暗き途より暗き途にと迷ひ申候。

其後『○○○は妻子が家を追はれて出ると共に聲をあげて泣いて居た、家人が其譯を尋ねたれど、男の事だから何とも話さなかつた、けれど多分妻子を所ひ切つた時の涙であつたらう』と先方の叔父なる方は話されしとか聞き及び申候。

意志弱くとも男子一匹なり殊に日本男子ともあるべき身が心にもなき振舞なごして夫で我心が満足にや候はん、心卑しき人を良き人と侍りし事の悔まれ申候、真心に勝る武器も無ければ此の心の何時かは現はる事のあらんかと十幾通の手紙にて詫入りしかど、其手紙のお手に入らざりしか又はお手に入りても讀



み下されざりしかは知らねど還し文の一言も無う只々石に矢の立つ諺を頼みに暮らし居り申候、愛兒も追々成人致し殊に父親ソツクリの丸顔にて片言の一つも云はるゝ様に相成れば如何にもして父親に抱かせ度う、我身の不心得より子に迄苦勞をかけるかど涙に暮れ居り候、何事もお出會ひ申し御不審の廉々をお答へ申上げ妾は良人に秘め居りし其罪を詫ぶれば御許し下さる事もあらんとお出會申上げらるゝ様にと愛兒と共に朝夕祈り居り申候、汗去れど夫も却々に難き願に候、二十年とは云へ箱の中にて大きうありし事なれば未だ子供の如き考にて涙拭く手も

急がはしげに暮れ申候、落つる涙を指にているひ母の顔を見て打笑む子を愛しとのみ思ひ申候、子供もある仲なれば子にも免じて許され度う妾は下女となりても嬉しう候へばとも願ひ候へ共是も空なる願に候ひき、先方の言分があれば此方にも言分があるのちやから其麼事では離縁にはならぬ今度から心を入かへてお氣に入る様すると云へば命にかけてもするのちや』と中に這入つて心配下さる方々には申され候へ共先方の母上が聽入れ給はぬ由申し居られ候、汗、如何にお骨折り下さるとも木石の如き人には情も候はねば縦令幾十年経つとも妾の身に二度と再



度淡路には歸られぬ様思はれ申候。此上は我子を立派に育て上げ此母の不心得の一部にても消ゆるを願ひ申候、精しく記したうは思ひ候へごも手隙の暇々にて致す事なれば文も纏まらず、是にて一先筆擱き申候。

白秋より

◎ 穂 草

徳富健次郎氏

ステツキがきららりと光る、ふりかへて見ると、橘黄色のぶら

提燈を吊つたやうなまん丸なお月さまが出てゐる。僕が移す一步一步に、そのお月さまは次第に高く、次第に澄んで、銀光が豆の葉や草葉や桑の葉にきら／＼流れると、其光を吸つてかして虫の音がいよ／＼繁くなつてきた。昨日の雨で悉皆洗ひあげた空は月光を帯びて、たら／＼と今にも露が滴りさうな。僕はセルリーの『Ast than pale』と云ふ月に寄する短歌を誦してみたが、其れも面白くないので、ステツキをふるつて、後半節に打截つた、つまらぬ、つまらぬ、詩人が歌はうが、月が照



らうが、吾敏君は明後日の朝は行つてしまふのだ——限りなくも知れぬ、空は勝手に澄むが宜い——僕の心は如何しても晴れない、月ばかり圓滿に澄むだつて如何するのだ——敏君を除却して僕は如何しても半圓にすぎない僕は草をうちたゝきく野路を行き盡して、うち闇い鶴沼の村に入つた。  
歸つてみれば、叔母を始め誰もゐない。盆踊りの留守にちやんく一つ着て椽端に水澤山の南京酒を手酌に飲つて居る老爺に聞くと、皆石川——即ち松村の方へ行つたと云ふ、僕も後追つて松村が許へ行つた。

月は大分高うなつてゐるが、村中は木立に遮られて、わづか螢程の光が砂地に落ちてゐる、例の寒竹垣の絶間からぬつと入れば、閉めた障子にランプの光がさして、静閑としてゐる。  
『松村君——留守かね』  
人の起上る氣配がして、小さな咳が聞えた。  
と思ふと束髪の大さな(併し可愛い)影が障子に浮いて、忽ちお敏君の姿が障子の外にあらはれた。  
光を負ふてよくはみえぬが、何處やら惱ましげに——或は泣いてゐたのではないかと思つた。胸はしきりに騒ぐ。



「松村君は？」

「皆様と御一同に——」

「散歩ですな貴嬢は」

「わたし——あの些し——頭痛が致しまして」と敏君は髪を撫でた。

「やすんでいらつしたのですね。餘程おわるいのですか」

「否、別に——もう清々致したやうでございますの——どうぞ

おかけ遊ばしてと敏君は一寸はたいて蘭の座蒲團をすゝめた。

「暑氣中りなすつたんですね」と云つて、僕はまだ立つてゐた

「どうぞおかけ遊ばして」

「は、有難う、何方へ、濱の方にですか、兄様達は？」

「濱でございませう。最う歸りませう、何卒おかけ遊ばして」

僕は頭頸腰をかけた。敏君は團扇をすゝめる。

「併しあなた起きて居ては悪いぢやありませんか」

「否、最う些しも——何卒御話し遊ばして——宿の者もあの、

踊りとかに參つてわたくし淋しくて仕様がありませんのですか

ら」とにつこり含笑む。

僕は消え入りさうな心地になつた。



『あの藤澤にいらつしたのでございますか』と敏君が沈黙を破る。

『は、郵便を出しに——あの事を早速國許へ申してやつたのです』

『いろく御世話になりよして——』と敏君は可愛らしい頭を下げた。

『否、お禮は此方から申すのです、松村君が早速承諾して下さつたので、叔母や一同非常に喜んで居るのです、併し父上や母御の御意見は如何でせうな』

『父や母も喜びませうと存じますが——』

『その話が出たら、何卒あなたからも——あなたの仰有ることなら父上や母上もすぐ御聽になさるさうで否、松村君がさう云つて居られたのです』敏君は少し頭をかしげて、含笑むた。

螢がどまつて居るやうに、寒竹垣の間からちらく覗いてゐた月は、垣を過ぎて、其處に茂つてゐる樺の間からひよつくり顔を出した、同時に木の葉がざわくと鳴つて月の息かどばかり涼しい風が面を撫でる——と思ふと、敏君の後のランプが吻と消えた。



月の光が水の如く流れこむ。

『まッ』

敏君は微音に叫んで、手早くマツチを擦り、二三度つけたが、今は水の流るゝごとく吹き出した風に忽ち吹き消さるゝので、敏君はランプを次の間に移し、隔の障子を引たてた。

燈火が退いたので、月は得たりと僕等が——僕は椽に腰かけ、敏君は四五尺離れて少し身をそばめ、團扇をいちつて——話す八疊にさし込み、隅々々の深黒い蔭の中に劃然水際だつた光を投げ、寒竹や樺の影はまた庭から椽、椽から座敷と上つて、

僕等の浴衣も月影と樹影とさながら染め分けた様になる。葉越の月も移る毎に、霜を置いたる疊の光は伸ちゝみ、風わたる毎に、墨繪の影は椽にそよいで、古歌の所謂『影定まらぬ夕月夜』敏君を見ると、可愛らしい笑顔が半ば月に出で、半は蔭に入つてゆらゆらと凝りもあへず愛嬌の露を堪え、團扇まさぐる膝の上、胸のあたり、兩袖、白地の浴衣に墨染の木の葉模様、のちらく動いて、掬は、手に漏り抱かば腕や融けんかと危まるゝ姿。

寒竹垣の下で、虫が鳴いて居る、何處かに踊りの笛の音が聞え



る。  
『好い月ですな』

『本當に好い月でございますこと』敏君は竊息をついた。

『斯様にあなたや兄様と御一處にお心やすくするのは珍らしいですね。ずつと昔お宅に上つたことがありますね、覚えていらつしらないでせう、あなたはまだお小さかつたから——僕が十四でした、兄様とよくお化をしてあなたを嚇したり、悪戯ばかりしてゐたでしたが』

『否、よく覚えて居りますの。あの。書を描いていた、いたの

をまだ持つてゐますの、國許に』

『さうでしたか』と云つた僕の心は張り裂ける様。

『年が立つのは早いものですね』

『本當に早く立ちますのね、あの母や鈴江さんや御一處に連れてきていた、いたのは最早四年になりますのね』

『來年卒業なさるのですか』

『何も出来ませんので』

『否、大變よくお出来なさるつて、鈴江さんがさう云つてました』



「嘘でございますよ」

「書をおかきなさるそうですね」

「嘘でございますよ」

「歌もおよみなさるでせう」

「否、何も出来ませんの、——何か致したいと兄にさう申しても、些も相手にしてくれないものですから」

「あなたの方は御兄妹で美しい」と云つてはつとして、僕は急に話を轉じ「兄様と御一緒に遊びにいらつしやい」と時處のわからぬことを云つた僕は常に大學の宿舍に居るから、敏君が遊び

に來られないのは無論である。併し敏君は嬉しいといふ顔を月かげにほの見せた。

僕は夢から夢へ深入りする心地。

「もうすぐ御歸省ですね」

お敏君は黙つてゐた。極めて微かな歎息を聞いたやうであつたが、それは木の葉のすれた音かも知れぬ。

「松村君がゐなくなるよ、淋しくて仕様がありません、——僕も——歸つちまはうと思つとるです」

「兄も大變ゐたがつてますけど——」



お敏君は俯いた。

あ、僕は西洋に生れた西洋人であつたなら、此時跪いて、お敏君の可愛らしい手をとつて『可憐の敏子嬢よ、吾生命よ、卿は此むくけ男と一生を共にしてたまわらぬか、ゆくゆくわが妻になつてたまわらぬか』と白々様に云ふのであるが僕はもう寸歩も前へは踏み出せぬ、無論後へも退かれぬ。僕は唯太息した敏君も差俯いて、團扇をみつめてゐる。

風はさら／＼櫂を揺つて、葉毎にこぼる、月かげは千萬の玉を閃めかす様に見える。

平素左様不辯ではないつもりであつたが、今夜に限つて如何しても言葉がみつからないのではない。僕の全身心に溢る、或ものは、到底人間の發明した言葉や文字のまごろかしい運搬器では運び了せぬのである。

實に好機會、恐らく二度とあるまじい好機會、僕の心を明しかなたの心を聞くに逃しても出來ぬ機會、併し僕はどうして宜か知らず、何と云つて宜いか知らぬ、さうする内には、一同歸つて來るに違いない、云ふなら今、明すなら此瞬間とあせるほど心は亂れ、口は澁つて、實に吾ながら吾を引裂いてしまいたい



心地。

『あまり長話してお氣分に障りはしませんか』

と云つて、あゝまた同じ無意味なことを繰り返して落膽した。

『否』と敏君は俯向いたまゝ。

話はまた途切れる。

風はすらく流れるが、僕等の座邊は恐ろしい濃厚な空氣の壓迫があつて、息もつまるばかり、言はずば心も裂けさうな。

一分間過ぎた——殆んど一世紀にも渉る長さの、ばたく云ふ音をみれば、敏君の側近く風が白いものを蹴してゐる。物の本

だ。

『その書は何ですか？』

『あの昨日貸していた』

『明治評論ですね——御らんなすつて？』

『はい』

『つまらないでせう？』

『否、大變に面白ございましたの』

『あの中に西洋の短篇小説を譯したのがありませう、御らんでしたか』



『はい、あれ大變に面白うございましたの』  
 『どうしても西洋人は甘いですね、まだく此那には幼稚な  
 のです。矢張りあの作者の書いたもので、短篇に面白いのがい  
 くらもありますよ』

『何様なのでございます』

『何様つて、幾らもありますがね』

『伺はして頂戴な、何卒』

僕は思ひ出る儘に、一短篇の筋を話した。露西亞の或田舎の別  
 荘に、貴族の嬢君が住むでゐた。年は十八、美しい、伶俐な、

やさしい、可愛い（恰度貴嬢のやうな、と云ふ言葉が驀然にか  
 け出したが如何しても唇の關所を通れなかつた）娘であつた。  
 其處に二人の戀人があらはれた。一人の中年の紳士、風采も立  
 派で、爵位も富もあつて、一寸彼姫宮を訪問に来るにも、一朵  
 何ナループルと云ふ珍花を持つて来る、結婚したらば、蜜月遊  
 は何時でも構はぬ、亞米利加にでも、日本にでも行かうし、交  
 際社會に出るならば、各の宮の舞踏會に金剛石の光を輝して  
 世の中の人の所謂幸福は此紳士が捧げて結納にする程の運命の  
 寵兒、今一人は平民の子の大學生、恰度僕の様など心は謂つた



が口は謂はなかつた) 腕一本でこれから身を興さうとする身體  
 無論財産もなく爵位もなく、容貌すら醜くて、併し併し其嬢君  
 を愛することに於ては世界を敵としても些も恐れず、その嬢さ  
 んが死ぬと云へば今眼の前で直ぐ死に、飛び込めと云へば水火  
 の中にも笑つて飛び込む位一心は思ひつめて居たが、臆して羞  
 じて如何してその心を明して宜いか分らず、戀ひて戀いて戀死  
 ぬる程戀ひても何時までも黙つてばかり——。

はつと思つて僕は話を止めてまたついぞ。併し話の糸は、いよ  
 く纏綿がつて、僕は人我を分き兼ねる様になつてしまふ、僕

は黙つてしまつた。

幾秒か過ぎ。

不圖忍び音の歔歔が耳に入つたので、驚いてみれば敏君は突俯  
 してゐる。

『あッ、お敏さん、如何しました？』

敏君は顔をあげた。涙が眞珠の如く頬を傳ふてゐる。何か云は  
 うとして唇を開いたが、言は聞えない、敏君は又俯いてしまつ  
 た。

僕は身も世もあられの心地。



『如何しました？エ？エ？』

『わたし……あの……』敏君の聲は獻欵に埋れて聞きとれない

『僕の云つたことが氣に障つたら堪忍して下さい。エ、エ、お敏君』

僕は夢中になつて背を撫でた。

突然僕の手を燃ゆるが如き手に緊と握られた。あつい雫が手に滴る。

僕は狂氣の如く。

『堪忍して下さい』と云ひつゞける。

『わたくし……あの……』

『僕が悪のです僕が悪いです』

『御免……御免遊ばして……わたくし……あの……』

『エ？エ？』

『わたくし……、あの……うれ、嬉しくて……』

四邊の世界は忽焉と消えてしまふ、イタルニテ永遠の夢の浮橋に僕等は唯  
二人立つて居る月は照つてゐる。風は吹いてゐる。虫は鳴いて  
ゐる、併し僕等は見もせず、聞きもせない。

何秒若くは何時間若くは何世紀すぎたかしらないが人間の聲、



(後で考ふれば石川の細君が松村の垣の外を高笑して歸る聲であつた) 愕然に吾にかへつた時は僕の右手は敏君の左手を、敏君の左手は僕の右手を互に緊と握つて居た。

◎青

春

小 栗 風 葉

繁は密と横を向いて『でも、許嫁の方に濟みませんやうで……』  
『何故ですか?』と手を退込めて『許嫁なんて事を頼みにして安心してゐる、その頼を失はすのは可哀そうだと僕も思ふけれど』

も、其以外にすむのすまないのと這箇に那樣疚しい事なんか少しもないと思ふので、元々許嫁と云ふものが、單に親同士が決めた結婚の豫約で、始めから本人は……當時當人の愛その物には無交渉ですの、結婚の豫約はされてない、愛は自由ですから許嫁を措いて結婚でもしたら濟まないか知らないが、お互ひに何も結婚のために愛するぢやない、愛せんがために愛するので、戀愛其自身が永遠の希望なんぢやありませんか、ね然うでせう?、小野さん』  
『えッ』と目を輝かして男の顔を見挙げたが、伏目になつて、



『ですが、何時までもさう、あの、永遠に参るでせうか？』  
 『永遠に行かなきゃならないぢやありませんか？、お互さへそ  
 の心なら……』

『でも、貴方は左に右く決つた方もおあんなさるし……何だか  
 私し、先になつて悲しいことでもありやしないかと思つて……  
 『充らない事を——僕は大丈夫だけれども、貴方が——貴方こ  
 そ先きになつて變らなきやいゝが……』

『あら、私は那樣……』と思はず息を喘まして『私はそれは誓  
 つても可いわ！』

『僕だつて、永久に誓ひますよ！、小野さん』

『關さん、私も誓ふわ！』

二人の目と目はピツタリ合つた、月は鮮かに、瞳の光も讀交さ  
 れるばかり。欽哉は那邊此邊又歩き出して『ぢや最う疑ふ餘地  
 も何もないでせう、二人の心と心！、星程慥かなことは無い、  
 愛するもの、心は帝玉だつて奪うことは出来ませんからな。あ  
 なたは先になつてどうだとか先の事を心配するけれども、先も  
 今も無いぢやありませんか、時の力にはすべての物が滅される  
 かも知らないが、然し愛だけは滅びない！、時のために滅びた



り變つたりするやうな愛は眞の愛ではないので、僕の永遠といふのは、人がよく先の見えた十年か二十年の事を幾久しくとか何時までとか云ふが、それとは違ひますよ、無限絶体の意味で不朽の愛！我々は宇宙の大精神を愛によつて感得して、二人の間に共通の實在を抱くのです！」と乗地なつて喋つたが、土間の端の隅に立つと、偶と澄み渡る月を見あげて目映しげに口を噤む。

『どうですか、全で夢のやうな夜ぢやありませんか！』と振返つて言つた「私かな、甘美な光が仄々天地を包んで了つて恁ふ

實に幽遠な、沈静を何だか現實を離れた他界をみるやうぢやありませんか」

「實にね」と辭寡に、繁もうつとり月に見惚れてゐる。

「恁うして月光に對してゐると、我々の心まで一緒にそのなかへ恍惚として融けてゆくやうですな、感覺だの知力だの仄やりなくなつて了つて、唯奥底の情のみが獨り呼吸してゐる、現實界の對象と離れて、眞に我といふものが瞭り、浮んで究り外界の生活を去つて、内界生命の人となるので……」と又してもむつかしい事を云ひ出したと思ふと『だが、小野さん、我々戀す



るものは始終さうぢやありませんかしら？、現實を離れて情の  
 聲を聞いて、而して永遠に生命の甘い泉を味ふのだから。月が  
 萬有をその儘美化すれば戀は人生を藝術化する！、今夜我々を  
 憐うして照してゐるこの月が、やがて我々二人の悠久な戀の姿  
 ぢやありませんか。ね、那の麗はしい月が天にある限り、我々  
 永遠に戀のスイートライを……』と言半して欽哉は愕然と辭を  
 留めた。

不意に表門を閉る音がしたので、何時頃か、社内はもう鎖さる  
 のである。で二人は繪馬堂を出て、裏門からその眞暗な坂を

下りた。

◎暑 中 休 暇

滑草を敷つめたやうに芝草が青々として、所々に蒲公英やすみ  
 れの模様を彩り、温かさうに日光が放射されて居る、ゆるい匂  
 配のある堤に大學の制服を着た粕谷喜一は、

『この邊は實に好禰ですなア、休んで行きませう、八重子さ  
 んもお休みなさい、大分歩いたんで草臥れたでせう』



と云ふ。ハイかつた束髪に派手なりボンを掛け、緋人のくすんだ紫地の羽織に對の着物、紫紺のカシミヤに蒔黄甲斐絹の裏附袴をはいて、オリーブ色の洋傘を挿した女學生櫻井八重子も、

『草臥はしなくツてよ』

と云つたが、柔か草の上に腰をおろして、堤の上から顔を見られない用意か、洋傘を背負たやうに二人の頭を隠し、足を投げ出すと裾がまくれてチラリと友禪の蹴出が見えたが、足には膝まである長い靴下をはいてゐた。

『あら、蝶が来てよ』

と八重子は軽く粕谷の肩のあたりを突いた。二人の視線は二三尺先の蒲公英に止つた蝶に注がれた。また一羽ひらくと飛んで来て、羽を休めてゐた蝶は椰揄うやうに飛び廻つた。止る蝶も煩さうに翅を二度動かしたが、誘はるゝ儘に狂ひ出して擦れつ紛れつ、高く低く睦まじく遊んでゐる。

一眞個にあゝして狂つてるのは愉快さうねえ……あれ又此方へ来てよ』

と嫣然して顔をチヨイと見た。

『愉快でせう……僕は今丁度あの蝶と、同じ境涯にあるやうな』



氣がして、彼れがあゝして狂ひながらなされる情話が、僕の胸に深く刻みこまれるやうで……』

と見返す八重子はどんより潤だんやうな、愛らしい眼を羞明さうにして、夫れも堪られなくなつて袂で顔の半面を掩つた、けれども掩ひ切つて見ずには居られなかつたので、黒目がちの愛の泉が漲つてゐる眼を袂で押へた間から見張つて、頬に突窪のはひる度にリボンが漣のやうに波打て動いた。

『八重さん御覧なさい、貴女の足のどこまで來ましたよ』

『あらまア眞個に可愛いこと……彼あしてゐてお話があるんで

せうか……』

『そりやあるでせう、我れくにある如く彼等にも亦た爲される情話があると信じますが、貴女は左様思ひませんか』

『あるでせうね……』

と云たときは袂は顔から取拂はれて、頬の邊にまだ餘燭がホンノリと櫻色に馨つて居た、袂から落ちたのか膝の上ノートの切ツ端に鉛筆の走り書きした物が認められた、

『八重子さん、それは何……彼の人の手紙ぢやなくつて……』  
『厭なこと、そんなものぢやないわ』



「何ですか、お見せなさいな、他人の信書なら見ては悪いが左様でないなら好でせう、一寸と見せたまへ……」

「そんなものでなくツて……ゲーテの詩ですわ」

「戀の偉人、獨逸の詩神ですか、貴女ゲーテがお好き……」

「好きなものよ、森博士がお譯しになつたファウストは面白くツてねえ、妾大好き」

「全く好です實地應用ですから……」

「彼の方はそんな方……」

「左様です、青年時代の傑作エルテルの悲哀は彼れの情話です」

夫れからロオマ哀歌ですな、あれも伊太利でマツダレオ、リツギといふ小女に戀をして遂げずブオーヌチヌといふ乙女と交りてを結んだ戀の花です、又あのアアラストの作は、ウルリノ、ド、レウエツオウといふ十九の少女に戀をして巧く成就しないので非常な苦悶をしたを、ゲーテの友人等が氣の毒に思ひ、公然少女に結婚を申し込んだですが、何しろ一方が七十四といふ老人の戀でせう、少女の母親が許さなかつたため不成功に了つた、戀の副産物ですよ」

「左様、七十四で十九の少女を戀するてえのは滑稽のやうなけ」



れど熱情のあつた方ですのね、戀の偉人だわねえ』  
『だって熱情の点に於てはゲータに一步も譲りませんが……夫  
れに比べると僕は幸福なものですわねえ』  
『何うして……』

『貴女と、満身の愛を交換することが出来るのですもの……』  
と笑ひながら言た、八重子の顔は再び夕日の光を受けたやうに  
赤々となつて、愉快さうに鮮かな輝きが迸しつた。  
八重子は洋傘を置いた儘起つて、美しう咲き誇てゐる、白堊と  
菜の花を摘み、頬擦しながら持て來て。

『貴方、付けても好くつて……お厭？……』  
と粕谷の横になつて居る側へ凭れかゝるやうに擦寄つた。

『感謝します、有難う……』  
と起き直ると、八重子は洋服の襟に白堊と菜の花を挿した。  
『感謝、感謝』

(下)

試験も済んで最う二三日で暑中休暇になるといふ夕暮、粕谷喜  
一は人待顔に只だ一人根津權現の境内を散歩してゐた、裏門の  
方から二人連の學生が遣つて來たので、避けやうとしたが最



接近して避ける間がない。

「おい、粕谷一人か……廣小路の鈴木へ往くのだが来んか、交際よ」

「今夜は失敬する、親威の奴が来るって端書が来るとから……」

「貴様、この節友人を避ける形跡があるぞ、いかなア……」

「其様ことはない、明日来んか……」

「驕るだらうな」

「麥酒ぐらゐは驕るさ……来いよ」

「うむ、往かう……ちや失敬する」

と學生の別れ往くを矢大臣の門の蔭に隠れて見送つてゐた。八重子は拔足で側へ寄つて、無意識に池に泳ぐ鯉を見てゐた粕谷の後からそつと肩を叩いた。

「長く待つてッ……」

と聲を掛ければ、不意打に驚いて振り返り。

「ア、吃驚した……酷いのねえ」

「堪忍して頂戴な、お詫してよ……長く待たして……」

「なアに十分ぐらゐだらう、急用があるとの端書で心配になつて、時間を待ち兼ねてやつて来たのだが……」



「何うもお氣の毒さま、貴方土用休みにお歸りなさるの……妾ね歸れと言つて來るけれども貴方が此方へお出になるのなら歸らない積りなのですわ、だから早く返事をして遣らないと、親達も待てるだらうと思つてよ」

「僕も毎年歸省するのだが、此間うち貴方と相談してた事もあつたし今年も歸省せずに空氣の好いところで消夏を遣らうといふ考へで準備最中なんです。お歸りならないのね、夫れぢや妾も歸らないね……何處へ入らッしやる豫定なの……妾も尾行ていつても好くツて……」

「僕も貴方と一所でなけりや歸省するのだが……天使のやうな愛の神様を遠ざけるのが辛いので……」

「あら、愛の神なんておひやらかしては厭よ……避暑は何處なの……」

「妾だつて出すわ、共同の生活にしたら好ぢやありませんか、貴方ばかり出させるてえ事はなくツてよ」

「それは助て貰ふとした處で、放心した處で口が煩いでせう、それで場所の撰定には大に苦心慘憺して居るのです」

「全くだね……知つてる人に見られちやア……だがね、貴方と



一所に避暑をしたら、知らないものは夫婦だと思ふでせうか、何だか極りが悪いやうな氣がするわ、貴方は何ともなくツて』

『時にはそんな事もあるでせう』

『一日も早く往つて、何時までもく一所に居たいわ……妾ね新婚旅行のお稽古だと思つて、家庭の主婦になつた氣で遣つてよ貴方は主人よ』

と思はず訝々した笑ひを漏した。粕谷も愉快さうに釣込まれて笑つたが。

『新しい家庭の試験とは斬新奇抜な考へですな、實に貴方は意

外な警語を發するよ、天才だね……僕は貴女の手に依つて成る膳部に向ふのが今より樂みです、その時の愉快は言葉の上では迎も言ひ得られまいと想像して居ますよ』

『變なものを拵へて怒られるかも知れなくつてよ、此様女は妻には持たれないと嫌はれたら何う仕様かと思つて、斯う胸に痞えるやうで嬉しいのと心配なのがお腹の中で衝突して、妾迷つてるの……』

『決心をまだしないのでか、避暑は止めですか……』

『それは決心も決心、大決心ですわ、だが心配と愉快と何方の



「何が重いかと思つて……」

「何ですと、詰らないことを言つて……夫れより避暑地の撰定問題は何う解決したものでせう……染井の例の植木屋では餘り接近すぎるし、海邊には往く人が多から、何處が好でせうねえ」

「左様ですな、何時か往つた彼の池袋の百姓家は……あそこなら電車の便利も好し一寸と人の氣が注ぎますまい……」

「成程、好でせう……燈臺下暗しで氣が注ぐまい、早速交渉をして見ませう……貴女今夜は用があつて……」

「何處かへ……遅くなると友達の家泊ると云つて來たわ」

「では染井へ往きませうか」

と粕谷がいふを八重子は頷いて、二人は急に歩き出した。此の年の夏休み中、夫婦らしい若い男女が、池袋の近所に睦しく散歩してゐるを見かけた者もあつた。

◎湯

島

詣

泉鏡花氏

「水錢をおくんな」と豆を装つてならべてある土器の蔭から、丸々たい、幼い顔を出されて、懐を探るとない、袂に手を入



れるとない、なにもない、帯の間には固よりない。

『どうしたか知らん』

『水錢おくんな』

梓は極がわるいので、

『おや、おや』と疑はしさうに言つたけれども、一種の見得で

自分には掬られたあてもないのである。

小僧は同じことを

『水錢をおくんな』

『まあ懷中を忘れたさうだよ』

目をばちくりして委細構はず、

『水錢をおくんな』

ただ六ツばかりの小兒に對しても、梓は性としてこれには顔を赤くして立場なく後へ退らうとする背後に立つたのが、朝參の婀娜な美人で、罪もなく莞爾々々しながら、繻子の不斷帯の間から、鼓と懷紙に包んだ紙入を抜いて取り掌に擴げて緋地の檻樓錦の紙入の中から、指で環を拵えたやうな、小さい玩弄の緑の天鷲絨の墓口を引出して、パチンとあけて、幼児が袂を覗くやうに、あどけなく、嬉しさうにぱつちりした目を細めて見



ながら、一片の銀の小粒キラリと撮むで、向ふへ投げた。

『小僧さん、旦那様の分もあるんだよ』

梓は屹となつた。

美人は願みて嫣然として、

『あなたや、さあ、手をお出しなさいな』

梓はこゝに到つて、胸中先づ後の謝恩を決しながら、衝と差しだした。醫師の如く爾く綺麗な手に、一杯の清水、恰も玉のごとき灌りで、颯と碎けると更らに灌いだ、雫も切らせず、

『私を使つて下さらなくつて』と落着いて静かに秋波に覗い

ていひながら、一寸仰向いて端を引いた、奉納の手拭、未だ手摺もなく新らしい。

茶色の地に、白で抜いて、數寄屋町、大和屋内でふ吉とある。

『姉さん屹度御禮をする』と梓は心をこめてはじめていつた。

『あら、何んですよ』

『いゝえ』と押へてそのまま、別れて敷石の上を渡つて、額堂の軒、宮廂、鳥居の下、御手洗の屋根に留つた鳩があちら此方しばく啼いて、二三羽、二人が間をはらくと飛びかはした、納豆々々の聲遙かに、人はあたりになかつたのである。此間二



年相立ち申候。歌枕の今夜の逢曳。

「悪いことないから、その綿の入らないものを威張つて着るのと、いつもいふことだけれども、これから暑くなつて、氷の打欠でお飯にかけて食べるのと、それから無理酒を飲むのは止せよ、氣を着けなけりや、お前今年は大厄だ」としめやかに云つたが弗と心着いて手を弛めた。

「酔醒か、寒くはないが」

「いゝえ」と内端に小さな聲でものを考へるが如くいつた。

「然うか、又冷えるぞ悪いせ」

「えゝ」と仇氣なく秘さず打ち明けて縋り着くやうな返事をす  
る、梓は此聲を聞くと一入思入つて、あはれに最惜くなるのが  
例で、

「體は最うすつかり良いのかい」

「えゝ」

「お前は駄々子で、鼻端が強クツて、威勢よく暴れるけれど、その實大の弱虫なんだから心配なんだよ、此頃は内で姉さんと喧嘩はしないか」



『ふむ』と泣き出しそうにしながら、蝶吉は無理に片頬で微笑む。

『矢張り母様の夢ばかり見てるのか』

『え、』ともいはず蝶吉は面を背けると、御所車の簾の青い裏に燃立つやうな緋縮緬を手からんで、引出して、目を拭つて『何にも言はないで下さいな、胸が一ツ杯にあつ来てよ、可笑しいわねえ』といつて、袖口を除けたが、ばつちりと目を睨いて梓を見まいとするかの如く、あらぬ方を瞰めたけれども、『おやく、可けないねえ』

又俯向いて目を塞いで、

『貴方手を放して下さいな』

聲も消入るやうであつた。

梓は左も右も蝶吉の心の落着いてゐるのが知れて、いふまゝに手を放したが殆むど矢心してゐるやうな女の体は、そのまゝ背後に倒れるだらうと思つた。

蝶吉は、却つてちやんとして膝に両手を組みながら怵惚として梓の顔を見て居たが細い聲で、

『あなた』



て屏風に影が映つた。その胸をしつかり抱いた。着物の裾が両方から、はらりと迫つて、身も瘦せた、細々とした指の尖が、肩から見えて、潰し島田の亂れかゝつたのを、ふら／＼とさして熟と見て居たが折れたやうに身を倒す、姿はしぼんだ如くなり、聲を殺してわつとないた、梓も耐らず背向になつた、二人の茫然した薄い影は、件の秋草の中に入つて、風もないのに動いたと見ると、一人は疊へ、一人は壁へ、座敷の影が別れたのである。

『何うしたの』

『後生だから顔を見ないで下さいな』

梓は思はず面を背けた、火鉢の火は消えかゝつて、籠洋燈の光も暗い、唯見ると瘦せた薄と消れた女花郎と、桔梗とが咲き亂れて、黒雲空に日は傾いて照らさむとも見えす、あはれに描いた秋草の二枚立の屏風が立つてゐるのが薄暗い灯で幻のやうなもの淋しい。

『私泣くんだからあちらを向いても可くツて？』

梓は頭から寒くなつたが俯向いて頷くと蝶吉は向ふむきになつ



◎瓦斯の光り

男はあんまり飲ける口ではないが、それでも女のお酌でいくらか飲んだ、色の白い男のほんのりと紅く頬を染めたのを、女も美しく見た、何處やらに、お花の札の冴えた響き、まだ宵ながら。

女は懷中鏡を出して顔のお化粧を直した。

「妾ね、みんなに兄さんがあるのに、妾にばかりないから淋し

しくて仕様がなかつたのよ。今日からは兄さんが出来たんだから、嬉しいわ」

女の言葉は沈んできこえた、男も女も素性を知らないではない孤兒で、伯父さんに養はれたがその伯父さんが生活にも困るので、斯うした稼業をするやうになつた、頼るものは、マア無いと云つていゝ、半玉の間も、踊は可なり上手かつた、容貌はいゝ方だが、その割に賣れる方ではなかつたのもお庭敷が華美でないからだらふ。

「私で間にあふなら兄さんにも、おやぢにでもなるさ、いゝ



兄さんの出来るまでのつなぎだつていゝ……』  
男は女に酌をしてやつた、女はそれを半分飲んで、

『助けて頂戴、ね、兄さん』

『あいよ』

『兄さんにお目にかゝつた時ね、三人連れだつたね、大岩さんで、妾、よく覚えてるのよ妾、出てから三日目、おどくしてゐるッて兄さんに笑はれたの』

『そうだつた子』

『お伴れの、謠ばかりやつてなさつた鐵道のお方はどうなすつ

て、あれから些ともお見えになりませんのね』

『あれは今、朝鮮に行つてるよ、アレから、お前に會つてからはモウ四年になるんだね』

『さうなるは子』

男も女も暫らく黙つてゐた、電燈がふつと消えた、女中のお琴さんが来て瓦斯に火をつけて呉れた、電気はなか／＼つかない座敷の中は今までの紅を帯びた光と違つて、蒼白い瓦斯の光に夢の世界のやうになつた。

『妾、吃驚してよ、電気でも消えるわね』



「私は、電氣の消えたのには驚かなかつたが、おまへが私の手を堅く握つてるので、痛くつて仕様がなかつた、ほら、斯様に赤くなつてるだらう」

「御免なさい、けど、兄さん、別嬪さんが握つた痕だから、いゝわ」

「別嬪さんつておまへかい」

「ほ、ほ、……」

男は昵と女の顔を見て居た、美しいなかにも淋しい處があると思つて、

「別嬪さん」

「はい」

「一杯あげませう、思ひざし」

「違ふでしやう、長崎に行つてる人ぢやなくつて、叱かれてよ」

「おまへも知つて居たのかい」

「兄さんのことなら何でん知つてますわ、大岩さんでお目にかゝつた晩から岡惚てしまつたもの」

「それならさうと早くいつて呉れ、ばいゝのに、ちやア、今日



はい、んだ子」

「長崎の人に恨まれると怖はい」

女は角の見得・電燈がやつとで黠いた、男は女に、また盃をさした。

「此の頃でも大岩のは、狂言に凝つてるやうかね、暫らく彼處へは行かないが」

「え、彼の人は大さうお上手なんですつてね、妾達にはわかりませんけど」

「素人の仲では上手い方ださうだ」

「お人形さんのやうな半か座敷に這入りかけておしつけ通りにお低頭をした。

「遅かつたね」

と、男は半玉にいつた、半玉は男に近よつて挨拶してから女に「姐さん暫らく」といつた。

「身体が悪かつたつて、モウいゝの」と女は聞いた、そして火箸で火を直した。

「モウすつかり」

「戀病ひかい」と、男が、



「あらいやだわ、嘘ッよ、ちつとばかり風邪をひいたんだわ」

「風邪もみそめ風邪の方だらう」

「みそめ風邪つてありやしないわ」

「あるとも、おまへ常盤津のお師匠さん處にお稽古にゆくだらふ、何でも壽佐久に岡惚れてるつて云ふせ」

「いやアよ、彼様な女見たいな人」

「だって、今、話を聞いたばかりだ」

「誰に」

男は顔で女の方をさした、半玉は女の方を見た、女は嘘よとい

つた。

「姐さんは其様なことをいやアしないわ、嘘つきねえ、藤さん  
は」

「は、は、は」

如 水 生

◎ 心 意 氣

富士松は裾に秋草の模様のある縮緬の五紋附で、薄りと脂粉を粧ひ、莫迦に氣高い装をしてやつて來ました、其れは何時も



の絞りの浴衣に伊達巻を締めて、家に寝轉んでゐる時の姿から見ると、數百段立優つて見えました。

そして、其のスラリとした背格構、人懐こい目元。

『おや、私すつかり御挨拶するのを忘れてゐたわ』

と、極り悪るさうに一寸改まつて、

『今日はお芽出度うございます』と軽く會釋して『實は今お母さん、彼家へ伺つたら、第一番にお引越の御挨拶をするんだよつて教はつて來たばかりなんですの』とハンカチで口を掩ふてホツと笑ふあたり、私の目には堪らない程美しく見えたので

した。

富士松は、段々私の傍へ囀り寄て來て、心持ち潤みを帯びた目元に、懐しさうな色を浮べ、私の顔を凝と見守つてゐましたがやがてホツと息を漏らして『お久し振りでしたはねエ』と私の膝に手を掛けました。私は旅から歸つて來て、たつた一度歸京の挨拶に行つたぎり、其後編輯の仕事で身體に閑がなく、富士松とは久し振りに顔を合せるのでした。

私は何だか、側にゐる三人に氣兼ねがされてなりませんので、照れかくしに盃をとり、



『まあ、一ッ上げませう』と云ふと、

『まあ、儀式は儀式ですから、お座附だけつけませう』と抱への女に目配せをして、一寸三味線をかちやくいはせながら、

『さあ戴くわ』と開き直り、其處にあつた麥酒の洋盃を取上げ

『私、これの方が好いの』と甘へる様にマンローウ井スキーの角瓶を指示しました。

私は、あの内氣な、碌すつば言も云へない様な女が、お座敷になると斯うまで違ふものかと心に思ひ乍ら、

『いゝんですか、這んな物を飲んで』とたしなめ顔に云ひます

と、

『いゝわ、私今夜うんと飲ませて戴くわ、嬉しい事があるんですもの。いゝでせう、えゝ、兄さん』

と、まるで實の妹が實の兄にでも甘へる様に、可憐氣を眼つきで私の顔を覗き込むのでした。

私はもう堪まらなく可愛くなつてきて、突然抱きつひてやりた様な氣がしますのを、ヂツと心に押へつけて、黙つてウ井スキーを注いでやりますと、富士松は私の心持を讀まうとでもする様に、凝と目八分に私の顔を見守り乍ら、眉を八字にして飲



み干し、

『兄さん、私の思ひ差し』と私に洋盃を手渡して、側にある鬼倉と小野寺に一寸氣を兼ねた體で、

『堪忍して頂戴』と優しく横目で云ひ、洋盃を持った私の手に自分の手を持ち添へ、膝と膝とを突合せて、なみくどウ井スキーを注いで呉れました。

富士松は、其れからも盛んに盃を重ねて、次第々々に酔潰れて來ました。

鬼倉や小野寺が、抱への女の三味線に合せて、踊つたり唄つた

りしてゐる間にも、段々私の膝にしなだれかゝつて來て、

『あゝ、苦しい、私苦しいわ。兄さん、何うかして頂戴な』と両眼を閉じたまゝ、私の手を痛くなる程握り締めたりするのでした。『だから云はない事じやないんです。あんなにウ井スキーのガブ呑みなんかやつて堪まるものですか。待つてらつしやい今冷やしてあげます』

私はお花に氷を命じ、其れをタオルに包んで額に當がつてやつたり、傍にあつた富士松の扇子をとつて、頸筋の邊を煽いでやつたりしてゐますと、富士松は急に氣がついた様に、眼をパツ



チリとあけて起き直り、

「兄さん、其お扇子へ何か書いて頂戴な」

「何をです」

「何でもいゝわ、歌でも發句でも」

「だつて、僕は、そんな氣の利いたものは書けないなあ」

「えゝ、何うで然うでせう、私には書いて下されないんでせう  
然うでせうとも」

「いやに何うも突つ掛つて來ますね。だつて、僕實際歌だの發句なんていふ高尚なものは知らないんですからね、なら、都々

逸でも書いて上げませうか」

「あゝ其れがいゝわ」

富士松はまるで子供の様に嬉しがつて、體をゆすぶりながら、  
扇子を私の鼻先へ突きつけるのです。

「まあ、お待ちなさい。机が未だ階下だから、階下で書いて上げます」と立ち上ると、

「ちやア、私も行くわ」とヒョロ／＼もんで立ち上り、階下段の薄暗いなかを、私に寄り添ふて降りて來ました。

私はペンにインクを含くませて、曾て福原先生から教はつた、



逢へば互にたゞ茫然と

思ふ半分口に出ず

といふ、あまり名文句ではありませんが、折節頭腦に浮んだ奴を其儘、金釘流に書いてやりますと、富士松は一二度口の中で繰り返して、

「兄さん、是は一體何う云ふ意味なの」と焼きつく様な頬を私の頬におツつけ、片手を私の頸に捲きつけて訊く。

「別に意味なんか有りやしません、唄の文句通りでさ」  
「だけどもさ、何とか意味が有りそうなものぢやありませんか

「困つたな、つまり唄の文句通、逢はずにゐると互に思ひが増すが、偕て逢つて見れば、思ふ事の半分もいへない、口に出ないといふんですよ」

「誰が」

「誰がつて……」

「貴下も随分察しが悪いのね。其れは誰が然う思つてゐるんですか、訊いてるんぢやありませんか」

「あゝ然うか、其んなら僕ですよ」

「あら、兄さんですつて、然うぢやないわ、私だわ」



『いや僕です、つまり僕の心意氣なんです』

『私の心意氣だわ』

『だからさ、貴女も僕もありませんよ』互に』です、お互に然う  
だと云ふんです』

『兄さん、其りや本當』

富士松はもう堪らないといふ風に、

『本當、本當』と小聲で囁き乍ら、私の胸に顔をうづめて、兩  
手でしつかりと抱きつきました。

私と富士松との戀仲は、這んな事から、とう／＼眞物になつて

了つたのであります。(萍 綠)

◎ 文 が ら

一杯二杯と飲つて居りますうちに、話しが段々廓遊びの事にな  
りましたので、私に薫と私の關係を一通り話して、

『一體どんなものだらうか』と意見を徴して見ますと、兩君と  
も口を揃へて、

『其りや女が可愛相だ、何も功德だから行つてやり玉へ』と莫



迦に油をかけられるのでした。

然う云はれて見れば、一體が行きたくてく堪らないでゐる處だし、其れに是から歸つた處で、例の南京虫のお化でも出さうな宿屋ぢや詰らないと、折節春の夜に適はしい小雨が降つて来るなんていふ情調で、どう／＼本郷三丁目で兩君に別れると、いゝ加減にお酒の廻つてゐる私は、ヒヨロ／＼もんで、

『オイ俵屋、吉原まで一體幾等で行く』

千束町を通り抜けて堤へ上ると、五十間附近のイルミ子一シヨンが、霧雨の中をバツと景氣よく照してゐます。私は無性に嬉

しくなつて、

『あゝ矢張り己の生命は此處にあるのだ』と享樂的な感慨が、胸一杯に溢れて來るのでした。

薫は其の夜、私に何も彼も打ち明けて了ひました。パウリスダ君よりも誰よりも、實はもつとく思ひ思はれてゐた男があつた事、其の男は薫のために伊藤松坂屋を縮尻つて、今は臺灣へ落ちぶれて行つてゐる事、もし疑ひを解いてくれるなら、其のパウリスダ君の手紙も臺灣君の手紙も、其外有象無象の手紙も一切私に渡して了ふといふ事、そして是から來る手紙は一切私



に見せるといふ事、是からは何事も打明けて私に相談するといふ事など、其れから其れへと、夜の白む頃まで話し続けました。しきり話しが切れると、薫は何思つたか、

『私今日といふ今日、貴郎が是ならばと思ふ様な證據を見せて上げます』

と、突如床から起上つて行つて、長火鉢の傍で、巻紙に何やら書いてゐましたが、筆を擱くと直ぐ、鏡臺の抽斗から剃刀をとり出して、長火鉢の猫板の上で、自分の小指をブツリと切り、其紙の上へ血をタラ／＼と垂しました。

『さあ是ならお氣が晴れるでせう。字は拙くたつて文が下手だつて、是が本當の私の眞心ですよ』

と、私の手に渡すと其儘、私の膝に泣き崩れた、見ると其れは起請文様の文面で、見からに慄然とする様な生血がポタ／＼と紙に滲んでゐるのでした私の極端な性的慾望は、遂に可憐なる薫をして、其の生血をまで流させたのであります。

私は無性に女が可愛くなつて来て、泣き崩れてゐる薫の背を撫り乍ら、

『解つた／＼、確かに解つた。もう決して僕はお前を疑はない



僕はお前に其んな事迄させやうとは思はなかつたんだ。痛かつたらう、濟まなかつたな……』

斯う云つて私も、薫の背に熱い涙を注ぎかけました。

其朝薫から大きな文殻の包みを三個渡されました、私は其れを車の蹴込に積んで、久振りに金龍館の樂屋へ歸りました。

そして其手紙は、薫と同名の武智薫といふ女優の手によつて、樂屋の大きな角火鉢の上で焼かれて了つたのであります。

私は其灰を少しづつ、紙に包んで、這んな手紙を書添へて、薫の許へ持たせてやりました。

例の文殻 今日午後一時三十分、お前と同じ名の薫さんといふ女優の部屋で、遂々焼いて了つた。

薫さんが火を点けて呉れたのだ。思ふに、臺灣君だつてバウリス君だつて、其他の有象無象だつて、お前と同じ名の、而も今年十九の花も羞らう美人の手によつて、焼かれたのであるから、恐らく満足な事であつたらうと思はれる文殻は三種に分けた、最初は藤方君のを始め、色々の人の一絡混の奴を一束にして焼いた。それから愈々臺灣君の一束を焼いたのだ。



僕は臺灣君の火を点ける前に、其内の一通をとつて、皆に讀んで聞かせた。其れは實に涙の出る様な眞實の籠つた手紙であつた、僕は思はずホロリとさせられた。薫さんも流石に目に一杯涙をたゝへてゐた。

僕は遙か臺灣の方面にむかつて、謹んで同君の健康を祝し併せて、斯うした因縁になつた事を詫た。

薫さんがマッチを擦つて、其一通に火をつける、僕が石油にひたした一束を、寫真と一緒に其火の中へ投げ込む。パツと火がうつる、ホロ／＼と氣持よく焼けて行く――

皆の目には涙が浮んでゐた。中には『惨忍だな』と云はないばかりに、僕の顔を睨みつけた人もあつた。全く焼き終つたのは午後二時三十分。さしにも多數なるあの文殻も、たゞ白く黒くフワ／＼とした灰になつて了つた。記念に其三種の灰を少しづつ送る、思出のためにとつて置き玉へ、大正四年三月二十日は、お前にとつても僕にとつても、忘れられない一日である。(萍綠生)



◎戀さしやき

何から何までお前の心盡し、僕は涙が出る程嬉しい。  
古い歌に

落魄れて袖に涙のかゝる時

人の心の奥ぞ知るらゝ

といふのがある。

人といふ者は、景氣のいゝ時にはチャホヤして、いざ其の人が

少し景氣が悪くなると、手の掌を裏返す様な冷淡なるものだ。

殊に、お前の今ある花柳界の人に其れが多い。

其れをお前は然うでなく、以前も今も變りなく、本當の眞心を  
以て盡してくれるのだ、僕は有難くつて、有難涙に暮れて  
ゐる。

昨日の手紙なんか『もう他人ではないのだから、何でも遠慮  
なしに云つてくれ』と書いてある處を讀んだ時には、僕は涙が  
込み上げて来て、思はずお前の名を呼んで、男泣きに泣きまし  
た、お久、お前は何故然う優しい事を云つて、この僕を泣かせ



て呉れるのだ。

僕はもう決して外の女など顧みない。此の廣い世の中に、僕が愛すべき女はお前一人だ。世間の人は何んど云はうが彼んど云はうが、お前より外に僕の愛すべき女はないのだ。

お久。僕はねエ、お前に丸鬚を結せて、お前と一緒に歩く日が今日の邊りに見える様だよ。然うなつたら、何んなに嬉しい事だらう。僕はもう今から其れを思つて、ぞく／＼する程嬉しがつてゐる。然うなるのは決して長い事ではない、もう直ぐだ、遅くとも來年の春頃迄には大丈夫だ。

僕の體さへキチンと極りがつけば、専ら其の運動にかゝる、今してゐる仕事が一段落つくのは今月一杯、其れから何處かへ奉公する、然うなれば僕の體がキチンと極まる、體の極り次第、専らお前の方の運動にかゝる。うまく行けば今年一杯、遅くとも來年の春頃迄には大丈夫だ。僕も其れを樂みに働く。

お前も其れを樂しみに辛捧してくれ。

僕は成るべくお前を藝者にしたくないと思つてゐる。ならうことなら、親元身受でも何でも、其の儘僕と世帯を持つ様にしたいと思つてゐる、けれども、愈々然う巧く行かない様だつたら



一時藝者にでも何にでもなるさ、藝妓なら自由に逢へもするし  
 廢業するにも世話がなくて可へ。若し東京で抱へ手がなかつた  
 ら、田舎へでも何處でも飛んで行くさ、僕もついて行つて、田  
 舎新聞の記者にでも何んでもなるさ『浮世離れて奥山住ひ』其  
 の方が水入らずで、結句暢氣でいゝかもしれない。  
 何れにしても廓を出る事が第一の急務だ。廓に居るんでは、お  
 前も辛いし、僕だつて辛い、何でも廓を出る算段をするのが肝  
 要だ。

其れから身體を大事にすること折角廓を出ても、直ぐ病氣にな

る様ではお互に詰らない。だから、出来るだけ身體を大事にし  
 て、僕と添ふ日を楽しみに、少々飲みたいお酒も我慢してせい  
 く體を大事にして呉れなくちや不可ん。  
 幾等書いてもく切がない。やつぱりお前の顔を見て、思ふ存  
 分話さなきや駄目だ。手紙では幾等書いても思ふやうに書き盡  
 せない、今度こそはお互にゲラゲラ笑つてゐないで、思ふ存分  
 思ひの有たけを、眞劍に話し合はう。  
 多分十二日の晩に行ける、十二日の晩に行けなけりや、十三日  
 の晩には屹度行ける、僕は今から其の日を楽しみにしてゐる。



お蔭で「情死するまで」は大分捗取る。けれども最初思つた様に三十回はなかく書けない仕方がないから、餘り遅くなつても不可ないと思つて、取り敢へず二十回だけ送つて置いた、多い十五六日頃から出始めるだらう。百日續く筈だ。

今日は、午前中に其の二十回を郵送して、久し振りに半日骨休めをして、其の閑に此の手紙を書いたのだ。

石鹼は上等だ。ありやなかく安い品ぢやない。あんなに奮發させて濟まない。三つもあるから先つ當分は大丈夫だ。

楊子入から石鹼箱まで買つて呉れて有難う。お前の使ひ古しで

も可かつたのに。

お負けに楊子を二本も、齒磨の五袋も、僕はその、お前のところで使つてゐた楊子と、使ひかけの石鹼でも送つて貰ふ積りでゐたのに、飛んだ散財をかけて濟まなかつた。

タオルは、僕が寝る時枕に掛けてゐた奴だつてねエ、然う云はれて見ると、何だか懐しい様に思はれて、お前の移香でもしてゐやしないかと思つて、香を嗅いで見たけれども、別に其んか香もせず、たゞクラブ齒磨の香が少し移つてゐるだけなので、ガツカリしちやつた、笑つちや不可ない、本當の事だ。



クラブ齒磨と云へば、僕がクラブ好きだといふ事を承知して、  
わざわざクラブ齒磨にしてくれたなど、有難う過ぎて涙がこぼ  
れる。

手紙の表書はあれで結構、なか／＼巧く書けてゐる、など、  
お世辭も云つて見たくある奴さ。

手拭は有ります。眞逆僕だつて手拭なしぢやゐられない。猫だ  
つて顔は洗ひます。これは冗談。

寢巻は汚し放題汚した。迎も日本洗濯ぢや駄目かも知られない  
から、出来る事なら、西洋洗濯へやつて貰らひたい。

では、これで筆を擱く、莫迦に長い事書いて了つた。  
急に又暑くなつて来た。體を大事に、静、静紫、紫君の諸君に  
宜しく。

毎日／＼部屋の中に閉ぢ籠つてゐる爲か、先日中の日やけが、  
少しづつ、剥げて行つて、お蔭で何うやら人間らしい面にあつて  
来た。などは、餘計な事だから、もう止め／＼。

十日午後二時認む

愛する久へ

へ う



色んな無心を云つて濟まないが、今一寸煙草を切らして弱つて  
 ある、もしお前の手許に二三本有つたら、寢巻と一緒に包んで  
 くれ玉へ。わざ／＼買つてくれるには及ばない。ほんの間に合  
 せに二三本あればいいのだ。

客つたれた事を云ふ様だけれど、煙草がないと、仕事か手に  
 つかないもんだから、客な無心を云つて濟まない。

久 ぎ の へ う

浴衣有難う、煙草有難う、何時も／＼飛んだ手数をかけて濟ま  
 ない、煙草は明日になれば、雑誌の原稿料の爲替が引換へられ

るから、ほんの今夜喫むだけ有ればいと思つてゐたのに、二  
 箱も心配して呉れて本當に濟まなかつた。  
 僕は一つ、莫迦に氣になる事があるのだ。いやに氣を廻はすと  
 笑はれるかも知らないけれど、何時も僕から使をやる時には、  
 屹度お前の手紙が這入つて来るのに今日に限つて、何にも這入  
 つて来ないのでガツカリした。

僕はお前から手紙を貰ふのが、今ではもう何より楽しみなのだ  
 今迄貰つた手紙だつて、毎日／＼二度も三度も繰り返して讀ん  
 である何度讀んでも何度讀んでも、新しい嬉しさを感ずるの



だ、今日も又、新らしいのが一本ふへると思ふて、僕は今朝から何程樂しみにゐたらう。だのに、だのに紙切一枚も這入つて來ない。僕は淋しくつて、淋しくつて、泣きたくなる程ガツカリした。

煙草もうれしい、浴衣も嬉しい。けれども、お前のあの眞實籠つた優しい手紙が這つてゐたら、其上何れほど嬉しかつたらうあの優しい、可愛らしい、何時ものやうな手紙が、今日に限つて這入つて居ない。お久。察して呉れ、僕は本當に、泣きたい程辛かつた。

そこで僕は邪推した。は、あ、これは僕があんな煙草の無心なんか云つてやつたので、見下げ果てた奴だと思つて、腹を立て、手紙を呉れなかつたのではないか……。もし然うだとすれば僕は飛んでもない無心を云つてやつたものだ。煙草なんか、一晩ぐらい我慢出來ない事は無かつたに、詰らない事からお前的心持を悪くして了つた、と泣きたい程厭や氣持になつた。

けれども、其れは屹度僕の邪推で實際は然うでなく、検査であり、張店に近い時間だつたから、忙しくつて書けなかつたのだらう、然うだらう、然うならう、けれど僕は淋しくつて、



淋しくつて……。

お久、どうそ、怒らないやうに、僕はもうお前より外に便りしてゐる女はない。だから、お前から貰ふ手紙が何よりも、楽しみなのだ、其れが今日に限つて見られなかつたばかり、こんな愚痴も出るのだ。可愛い奴だと思つて呉れ。

浴衣を替着へたので薩張した。お蔭で氣持よく仕事が出来ます。十二日の晩が待遠しい。子供見たいに、早く日がたつてくれ、ばい、などと、指折數へて待つてゐる。

お前の寫眞は、一日のうち五六度僕の机の上に乗つて、僕と話

しをしてゐる。本物のお前と話をするやうに、お前の寫眞と話して居るのだ、人が見たら嘸可笑しからうと思ふ、何んの事はない出来損いの清玄といふ見得さ。

「情死するまでが新聞に出始めたら、毎日読んで呉れ、僕は都新聞の讀者十万の人に読んで貰ふより、お前一人に読んで貰ふ方が、どれ程嬉しいか知れやしない。實際今度の情話は、お前に読んで貰ふつもりで書いた様なものだ、あ、逢いたい死ぬ程逢いたい。けれども、十二日の晩までは仕方がない。せめて張店ででも、他所ながらお前の顔を見やうと、何度出掛



て行つたか知れやしない。けれど何時も五十間あたりまで行つては、いや／＼其んな野暮な真似をしちや不可ないところ／＼引返して了ふのだ。その僕の、淋しさうに引返す姿を想像して御覽。可哀想な奴ぢやないか。

今夜も又、あのタオルを枕にかけて、お前の寫眞を抱いて寝ませう。そしてお前と話をする夢でも思ませう。それがせめてもの思ひやりだ、實際僕はお前の夢ばかり見て居る。

あ、遠音に太鼓の音がきこえて來た、仲の町のお茶屋だらう。畜生奴／＼、飛んだ愚痴っぽい手紙になつて了つた、

けれども、是れが本當の僕の本音なのだ、突はないで、笑はないで、暑いと思つたら、又寒くなつた。兎角氣候が不順だから、一層體を大事にする事。左様なら。

十日夜八時認む

萍 綠

愛する久へ

昨日のお手紙、嬉しく拜見しました併し、今日のお手紙は、實に胸が張り裂ける程、情なく思ひました。

何んといふお情けないお言葉をでせう。貴下の御平常の御氣性



として、然うお氣をお廻しになるのは、さら／＼御無理とは存  
じませんが。貴下が邪推をお廻しになればなる程、私の心のう  
ちは何の位情けないか知れませんが。その邊の處も、少々お察し  
下さらなくては、私一人可哀想ではありませんか。

昨日、貴下からお使ひ下さいました時、お手紙を差上げたいの  
は山々でしたけれども、御承知の通り昨日は検査日で、病院か  
ら歸つてきますと、ガツカリして臥せり、どう／＼お湯へ這入  
る時間が来て了ひ、お湯を上つて身仕度をしてゐる處へ、若太  
夫さんが御飯を食べに參り、其處へ貴下からのお使がございま

したので、どう／＼お手紙が差上げられなかつたのでございま  
す。

實は私も、お使の方に『お手紙を差上げたいのですが、只今店  
へ出る處ですから明日ゆつくり書いて差上げます』と申上げれ  
ば可かつたのに、たゞ『宜し』とばかり申し上げましたので、  
何時もお手紙を差上げたのに、今日に限つて差上げないで、あ  
ゝ飛んだ事をしたと、後で後悔致しました様な次第でございま  
す。

そんな譯ですから、何時／＼お使を下されたとして、何で私其



んな素氣ない心持が出ませう。私は貴下のお爲になる事なら、  
 どんな苦勞もいとはないと申し上げてゐるのではありません。  
 それは決して、一時の氣休めや何かで申し上げてゐるのでは無  
 いのです、本當の心持を申上げてゐるのですから是れからは決  
 して、あんなお情けない事は仰言らずに下さい。  
 私も只今は儘ならぬ身の上ですから、心に思ふばかりで、何う  
 して差上げる事も出来ず、たゞ儘ならぬ身を怨むばかり、毎日  
 々々貴下の御事ばかり思ひつゞけ、人知れず泣いて居ります。  
 至らぬ私の様なものでも、貴下は末の末まで可愛がつてやらう

どのお志、私は嬉しいやら有難いやら、此の心持は逆もお手  
 紙には書き盡されません。

其れ程に思つて居る貴下から突然あんな御手紙を頂きましたの  
 で、私は餘りのお情けなさに、思はず知らず泣いて了いました  
 若太夫さんに『薫さん、何を泣いてゐるの』と訊かれましたが、  
 眞逆然うとも打ち明けられず『一寸今、思ひ出した事があつて』  
 と知らぬ顔を致しました様な次第。

私はもうく、人が何んぞ云はうが、逆も貴下ばかりは思ひ切  
 れず、石に嚙りついても、何んぞ辛ひ思ひを致しましても、添



はずに置かない覺悟、もし、貴下に見捨てられる様な事があり  
 ましたら、私は此の世に何の望もない體ですから、どんな覺悟  
 でもする積りで居ります。どうぞ、少しは私の心の内もお察し  
 下さいませ。

何時も同じ事を申し上げる様でございしますが、私の様な者でも  
 東京に無けりや田舎へでも、貴下と御一緒に參られるのなら、  
 一年や二年藝者になりましたも、貴下のお爲めになる事なら、  
 決して厭ひは致しません。どうぞ、此の上とも短氣を起さず、  
 母上様やお妹御様に、一日も早く御安心をおさせなすつて下さ

いまし。私は貴下のおためなら、どんな苦勞も厭ひませんから  
 そればかりは暮々もお願ひ申します。

私も來年の春頃までを樂しみに、辛い稼業も辛捧します。もう  
 〳私の身は貴下にお任せしたのですから、未始終お見捨てな  
 く、可愛がつてやつて下さいまし。

昨日お使を下さいました時、お煙草をもつと差上げたいと思つ  
 たのでございしますが、丁度都合が悪い時ではんのお間に合せば  
 かりで相済みませんでした。

貴下は未だ〳、私に何か御遠慮をなさる風ですが、もう〳



他人ではないのですから、其んな水臭い事はお止め下され、恥しいなど、思し召さず何でも彼でもお打明け下さいまし。御不自由なものは、いつ何時でも仰言つて下さい。私で出来る事なら、何なりとも致します』

敷島二十、小包でお届け致しました。お受取下さいまし。

まだ、色々申し上げたい事がありますが、逆も手紙では書きつくされません、十二日を樂しみにお待ち申して居ります。

時候柄御身御大切に遊ばします様、くれぐれもお願ひ致します

七月十一日

久より

戀しきく萍さまへ

情死するまで

◎脚本金色夜叉

尾崎紅葉氏  
小栗風葉脚色

爺、ごうも奇麗なお嬢様だ、まるで繪に畫いたやうだ（と後を見送り居たりしが、海を見やつて）やれ、日が永くなつたと言つても、もう沖は暗うなつたれど、ぽつ、ぽつ、片付けて歸ら



うわい (毛布を疊み、床机を片寄せ、店仕舞ひして風呂敷包、大薬罐など携へて下手に入る)

四邊は暗くなりて、浪音のみ耳立つ、沖の方ほのく明はくなりて、十七日の月出づ。漁師二人、艀を擔ぎたるど、籠釣竿など携へたると、下手より出て来る。

甲 やあ好えお月夜だ、浪はねえだし、今夜の沖は打緊めたぞ  
乙 およ。丁度好い塩梅だ西風がそよく吹いてきただからこの間に沖まで延すべえ』

兩人茶店の蔭に入る。

乙『お、艀を突いてくりや』

甲『よし来た、そうれ』

乙『七日怨んで三日は泣いて、月の十日は雨が降る、すい〜 (と追分節、艀の音に遠ざかる)』

月登り切る。

貫一前の服装、外套なしにて、宮と打連れて上手より出づ。

貫『僕は唯胸が一杯で、何もいふことは出来ない』  
宮『堪忍して下さい』



貫「何も今更謝ることはないよ、一体今度のことは翁さん姨さんの意から出たのか、又お前さんも得心であるのか、それを聞けば可いのであるから」

宮「……」

貫「此地へ来るまで僕は十分信じて居つた、お前さんに限つて其那了簡のあるべき筈はないと、實は信じると信じないもあらはしない、夫婦のなかで知れ切つた話した、昨夜翁さんから委しく話しがあつて、その上に頼むと云ふお言葉だ（差含む涙は聲は震ふ）大恩を受けて居る翁さん母叔さんのことだから頼む

と言はれた日は僕の体は火水のなかへでも飛び込まなければならぬのだ、けれど、火水のなかへ飛込めといふよりは、もつと無理な頼みではないかと、僕はすまないけれども爺さんを恨んでゐる。而して云ふ事もあらうに、此頼みを聞いて呉れ、ば洋行さしてやるとお言ひのだ……。い……。い……。いかに貫一は乞食士族の孤兒でも、女房を賣つた金で洋行せうとは思はん！  
（貫一に寄添ひて、其顔を差覗き）堪忍して下さいよ、皆私か……。どうぞ堪忍して下さい（と貫一の手に縋りて、其肩に顔を推當て、忍音に泣く）



貫「それで僕は考へたのだ、是は一方には爺さんが僕を説いてお前さんの方は叔母様の方が説得しやうと云ふので、無理にこゝへ連れだしたに違ひない、爺さん叔母様の頼みとあつて見れば、僕は不承知といふことの出来ない身分だから、唯々といつて聞いて居たけれど、宮さんは幾らでも剛情を張つても差支へはないのだ。如何あつても可厭だとお前さんさへ言通せば、此縁談はそれで破れてしまふのだ、僕が傍に居ると智慧を付けて邪魔をすと思ふのだから、遠く連れだし無理往生に納得させる計だと考へ着くとさあ、心配で〜僕は昨夜は夜一寢寢はし

ない、そんなことは萬々あるまいけれども、いろ〜いはれるため可厭と言はれない義理になつて、若しも承諾するやうな事があつては變大だと思つて、家は學校へ出る積りで、僕はわざ〜様子をみにきたのだ、馬鹿な、馬鹿な……貫一ほどの大馬鹿者が世界中を搜して何處に在る？僕は是程自分が大馬鹿とは二十五才の今日まで知……知……知らなかつた。

宮は可悲と可懼に聲さへ立て、泣く。

貫「憤を抑ふ、呼吸は漸く亂れて」宮さん、お前は好くも僕を欺いたね。



宮は覺えず慄く。

貫「病氣と云つて此へ來たのも、富山に逢ふためなのだらう」

宮「まあ、其ばかりは……」

貫「お、そればかりは？」

宮「餘り邪推がすぎるは、餘り酷いわ。何ぼ何でも餘り酷いことを（と泣く）」

貫「お前でも酷いといふことを知つて居るのかい、宮さんこれが酷いと云つて泣く程なら、大馬鹿者にされた貫一は……貫一は……貫一は血の涙を流しても足りはせんよ。お前が得心せん

ものなら、こゝに來るに就いて僕に一言も云はんといふ法はなからう、家を出るのが突然で、その暇がなかつたら、後から手紙を寄越すが可いちやないか、出抜いて家を出るばかりか、何の便りもせんどころを見れば、始めから富山に出會ふ手筈になつて、居るのだ、或は一所に來たのかも知れはしない、宮さんお前は奸婦だよ姦通したも同じだよ」

宮「そんな酷いことを、貫一さん、餘りだわ、餘りだわと（正体もなく泣顔れつゝ貫一に寄らんとする）」

貫「（突退けて）操を破れば奸婦ぢやないか」



宮 何時私が操を破つた？」

貫 幾ら大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻の操を破る傍に付いて見てゐるものかい！、貫一といふ歴とした夫を持ちながら、其夫を出抜いて、餘所の男と湯治に来てゐたら、姦通してゐないといふ證據が何處に在る』

宮 さう云はれて了ふと、私は何とも言へないけれども、富山さんと逢ふの、約束してあつたと云ふのは、其は全く貫一さんの邪推よ、妾等が此地に来てゐるのをきいて、富山さんが後から尋ねて來たのだわ』

貫 何で富山が後からたづねて來たのだ』

宮 ……』

貫一は宮の答ふるかと、固唾を呑んで何時迄もく打成りしが、終に答へのなきに見るみる絶望の色。

貫 む、返事が出來ない所を見ると、ぢや最う…… (齒切をし  
思はず後に尻を突く』

宮 (驚き留めんとして一緒に倒れしが、頭を抱へ起して) 何如して貫一さん、如何したのよう！ (と涙に汚れたる顔を拭ひやる)



貫『(其まゝ宮の手を取り) 呸、宮さん恸して二人が一度にゐるも今夜切りだ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜切り、僕がお前に物言ふのも今夜切りだよ、一月の十七日、宮さん、善く覚えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月をみるのだから……再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通じて僕は今月今夜を忘れん、忘るゝものか死んでも僕は忘れんよ、可いか、宮さん、一月の十七日だ、來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨

んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ』

宮『貫一に取着き物狂しう咽入り) 其様悲しい事を云はずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱して下さいな私はお肚の中に言ひたいことが澤山あるのだけれど、餘り言難い事ばかりだから、口へは出さないけれど、唯一言ひたいのは、私はあなたの事は忘れはしないわ……私は生涯忘れはしないわ』

貫『聞きたくない!、忘れん位なら何故見棄てた(と立上る)』

宮『だから、私は決して見棄てはしないわ』



貫「何、見棄てないで、見棄てないものが嫁にゆくかい、馬鹿な、二人の夫が持てるかい。」

宮「だから、妾は考へてゐる事があるのだから、最少し辛抱して……私の心を見て下さいな。屹度あなたのことを忘れない證據を私はみせるわ」

貫「え、狼狽して行らんことをいふな、食ふに困つて身を賣らなければならぬのぢやなし、何を苦しんで嫁に行くのだ。内には三万圓を財産があつて、お前はそこの一人娘ぢやないか、而して婿まで極つてゐるぢやないか。其婿も四五年の後に學士

になると末の見込も、着いてゐるのだ、しかもお前はその婿を生涯忘れんといふほどに思つてゐるといふたぢやないかそれに何の不足あつて、無理にも嫁に適かなければならぬのだ。天下に是れぐらひわけの解らん話しがあらうか。如何考へても、嫁にゆくべき必要もないものが、無理な算段して嫁にゆかうとするには必ず何ぞ事情がなければならぬ。婿が不足なのか、金持ちの縁を組みたいのか、主意は決して此二件の外にはあるまい言つて聞かしてくれ、遠慮は要らない。さあ、宮さん、遠慮することはないよ、一旦夫と定めたものを振り捨てるくらゐの無



遠慮なものか、這麼事に遠慮も何も要るものか』

宮『私が悪いから堪忍して下さい』

貫『それぢや婿が不足なのだね』

宮『貫一さん、それは餘りだわ、那樣に疑ふのなら、私は其麼事でもして、而して證據をみせるわ』

貫『婿に不足はない。それぢや、富山は財があるから、してみると此結婚は慾からだね、僕の離縁も慾からだね、で、此結婚はお前も承知をしたのだね。えい……翁さん嬢さんに迫られて除義なくお前も承知したのなら、僕の考へで破談にする方は

幾らもある。僕一人が悪者になれば、翁さん嬢さんを始めお前の迷惑にもならず打壊して了ふことは出来る、だからお前の心持を聞いた上で、手段があるのだが、お前もいつてみる氣はないのかい(全身の力をあつめて、宮の顔を鋭く打目成り)

宮『……』

貫『(空を仰ぎて太息して)宜しい、もう宜しいお前の心は好く解つた』

宮は貫一の言葉を聞くに得耐へず、背を向けて、波打際に面を掩ふて泣く。



貫「夢だ、長い夢をみたのだ！(頭を低れて、磯馴松を縫ひ歩く内泣く)来る宮と打突つて)宮さん何を泣くのだ、お前は些とも泣くことはないぢやないか、空涙！」

宮「(聞得ぬまで涙に亂れて)どうせ然うよ」

貫「宮さんお前に限りさういふ了簡はなからうと。僕は信じる程に信じてゐたが、それぢややつぱり、お前の心は慾だね、財なのだね、いかな何でも餘り情ない、宮さん、お前はそれで自分に愛想はつきないかい、好い出世をして、さぞ榮耀が出来てお前はそれでよからうけれど、財に見換へられて棄てられた僕

の身になつてみるがよい。無念と云はうか口惜しといはうか、宮さん、僕はお前を刺殺して……驚くことはない……いつそ死んで了ひたいのだ。それを怵へてお前を人に奪られるのを手出しもせずに見てゐる僕の心地は甚麼だと思ふよ！、自分さへ好ければ他はどうあらうともお前は管はんのかい、一体貫一はお前の何だよ、何だと思ふのだよ、鳴澤の家には厄介者の居候でも、お前のためには夫ぢやないか。宮さん、お前は貫一を玩弄物にしたのだね、平生お前の仕打が水臭い、と思つたも道理だ始めから僕を一時の玩弄物のつもりで本當の愛情はなかつた



のだ。さうとは知らず僕は自分の身よりもお前を愛してゐた。お前の外には何の樂しみもないほどにお前の事を思つてゐる。其程までに思つて居る貫一を宮さん、お前は どうして棄てる氣かい。それは無論金力の點では富山とは比較にはならぬ。彼方は屈指の財産家、僕は固より一介の書生だ、けれども善く宮さん考へて御らん、ねえ、人間の幸福ばかりは決して金で買へるものぢやないよ、幸福と財とは全く別物だよ、人の幸福の第一は家内の平和だ、家内の平和は何か、夫婦が互ひに深く愛するといふ外はない、お前を深く愛する點では、富山如きが百人

寄つても到底僕の十分一だけでも愛することは出来ない、富士が財産で誇るなら、僕は彼等の夢想する事も出来ないこの愛情を以て争つてみせる、夫婦の幸福は全く此の愛情の力、愛情がなければ既に夫婦はないのだ、己の身に換へてお前を思つて居る程愛情を以てゐる貫一を棄て、夫婦の幸福には何の益もない、寧ろ害にあり易い、此の財産を目的に結婚をするのは、宮さん、如何いふ心得なのだ、然し財といふものは人の心を迷はすもので、智者の學者の豪傑のと、千萬人に勝れた立派なく男子さへ、財のためには随分陋ない事もするのだ、それを考へ



れば、お前が偶然氣の變つたのも、或は無理もないだらう、か  
らして僕はそれは咎めない、唯もう一遍、宮さんよく考へて御  
覽な、その財が——富山の財産がお前の夫婦間にどれほどの効  
力があるものかと云ふことを。ね、僕に飽きて富山に惚れてお  
前かゆくのなら、僕は未練らしく何も言はんけれど宮さん、お  
前は唯立派な所に嫁くと云ふそればかりに迷はされてゐるのだ  
から、それは過つてゐる、それは實に過つゐる、愛情のない結  
婚は究竟自他の後悔よ、今夜此場のお前の分別一つで、お前の  
一生の苦樂は定まる、だが宮さん、お前も自分の身が大事と思

ふなら、又貫一も不便だと思つて、頼む！、頼むから、もう一  
度分別をしなほしてくれないか、三萬の財産と貫一と學士とは  
二人の幸福を保つには十分だよ、今でさへも随分二人は幸福で  
はないか、男の僕でさへ、お前がさへあれば富山の財産など可  
ましいとは更らに思はんに、宮さん、お前は如何したのだ！  
僕を忘れたのかい、僕を可愛くは思はんのかい。

宮は耐らずなつて、犇と貫一に取着いて泣けば貫一も女  
の頸元にはらく涙を浴せながら、身を顛はせて泣く。

宮「嗚呼、私はどうしたら可からう！、若し私があちらへ嫁つ



たら、貫一さんは如何するの、それを聞かしてくださいな』

貫一(荒らかに宮を突放して)それじゃ斷然お前は嫁く氣だね!

是迄は僕が言つても聽いてくれんのだね。ちえ、腸の腐つた女

姦婦!!(つと罵りざま脚を擧げて宮の弱腰を礎と蹴る)

宮は横様に轉びしが、その儘砂の上に聲も立てず泣き伏す。

貫一(憎さげに見遣りつゝ)宮、おのれ、おのれ姦婦やい!、貴

様のな、心變りをしたばかりに間貫一の男一匹はな、失望の極

發狂して、大事の一生を誤つて了ふのだ、學問も何も最う止だ

此恨みのために貫一は生きながら惡魔になり、貴様のやうな畜

生の肉を喰つてやる、覺悟だ、富山の令……令夫……令夫人!

もう一生お目にかゝらんから、其面をあげてよくみて置かない

か、長々の御恩に預つた翁さん姨さんには一目會つて段々のお

禮を申上げなければ濟まんのでありますけれど、仔細あつて貫

一は此儘長のお暇を致しますから、随分お達者で御機嫌よろし

う……宮さん、お前からよくさう言つておくれ、よ、若し貫一

はごうしたとお訊ねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の

晩に氣が違つて、熱海の濱邊から行方知れずになつて了つたと



……』

宮「貫一さん、ま……ま……ま……待つて下さいと）矢庭に蹶起きて立たんとするれば脚の痛みに脆くも倒るゝを、漸く這寄りて貫一の脚に縋り付き（あなたこれから何……何處へ行くのよ）」

貫「宮の膝頭の夥しく血に染むをみて）や、怪我をしたか」

宮「寄らんとする貫一をせへて）えゝ、こんな事は管はないから。あなた何處へゆくのは、話があるから今夜は一所に歸つて下さい。よう、貫一さん、後生だから」

貫「話があればこゝで聞かう」

宮「此ちや私は厭よ」

貫「えゝ、何の話しがあるものか。さあ此を放さないか」

宮「私は放さない」

貫「剛情張ると蹴飛ばすぞ」

宮「蹴られても可いわ」

貫「力は力を極めて振断れば、宮は無残にも伏轉ぶ。

宮「貫一さん」

貫「貫一は向ふを差して早足に行く。」

宮「（起上らんとしては、脚の傷に仆れ）貫一さん、それぢや留



めないから、もう一度、もう一度……私は言遣したいことがある（ど起つべき力も失せたる様）貫一さんく〜』

貫一は途中で振り返りて、月影に透せしが、思切つて、更に急足に行つて了ふ。

宮『あ、あ、貫一さん！』

◎ 朋子と要吉

森田草平氏

この時石段を登る足音がして、裳裾の衣ずれと忙しい息遣ひと

を聞いたやうに覺へて——或は後から左様思つたわけかも知れぬ……要吉は不圖眼を上げた、其刹那石段の上に現れた女の上半身が焼着くやうに瞳子へ映つた、朋子が終に遣つてきた、要吉は思はず立上つて二三歩前へ出たが、その儘其處へ立縮んだ朋子は要吉と眼をみ合せたばかりで、直ぐに切符を求めに行つたが、やがて驛夫に前刀を入れさせて、首に巻いた手皮の襟巻を取りながら近寄つた。しどやかに一禮して。

『大へんお待たせ申しました。お手紙が門の受信函へ這入つてましたのを、今朝になつて拜見しましたから』



『いえ、私こそ火急なことを云つて上げて——それでも能く間に合ひましたね。手紙が大低無駄だらうと思つてゐました』  
何氣なく言はしたが、要吉は自分ながら語尾が振へたやうに思つた。

『今朝に限りて受信函をわたしが明けに参つたのです。それに何時も十時前でなけりや家を出ませんのを、今日は大急ぎで九時前に出たものですから、家ちや何だか變に思つてゐる様でした』  
要吉はそつと女の顔を見た、急いで來た爲めか、少しく上氣し

て、手に持つた襟巻で口元を蔽ふやうにしてるが別段意味があつて言つたのでは無いらしい。  
他人の家をたづねるので、朋子もわざ／＼着かへてきたものど見え、毎時の人を人とも思はぬ様な色合でなく、くすんだ柄ではあるが、流行の縞御召に撫肩をしなやかにみせた。羽織の袖に二筋真綿の糸を引いたのも、何となく懐かしげである。要吉はそれに力を得たやうな氣がした。事實を告げるなら今だと思ふ、けれども口では矢張外の事を云つた。  
『死の勝利の獨逸譯を持つてきました。矢鱈に書入がしてあつ



「汚ないんですか」  
 朋子は黙つて頭を下げた。

そこへ電車が着く。要吉は「ちやこれに乗つて参りませうか」と訊いた。朋子が頷ぎいたので、倚架の上に捨て、おいた書物を取らうとすると「あ、それは私が持つて参ります」と言つて、手を出した『いや』と後から押す様にして電車に乗り込んだ。

電車の中は幸い空いて居たので、二人並んで腰をかけた。要吉はつとめて軽い雑談を仕向けやうとしたが、二言三言談す間に自分から口を噤むで、真直に正面を見詰めた、頭の中は車輪と

一緒になつて忙しく廻轉する、斯うして電車に乗込んで仕舞つてからは、手を束ねて事實の露顯するを待つ外の外はない。自分ながら拙ない地位に陥つたものだ。恰も斯うなるべき筈ではないものが凭うなつた様な氣がする。切めて此騒つく胸を相手か悟つて呉れたらと思ふ。あらゆるものを見逃がさぬ女の眼だ恐らく知らぬ筈はあるまい。或は心の底を見ぬいてゐるのかも知れぬ、見抜いた上で出てきたのかも知れない——自分との密會に加はるつもりで、此間も電車は猶豫なく驅る。停留場へ着く度に、乗客がごやくごりのり込む。それと押合つて降りる者



もある、要吉は唯いろんち物音の交つた然雑たる騒音を耳にする許りでまるで眼前の去來を知らないであつた。

やがて電車は大久保の停車場へ近づいた。要吉はだんく俯向いた、朋子の足袋の爪先をみつめたまゝ、顔を背向けて居た。電車が徐々と進行を留めると、車掌が大久保、大久保と呼んだ乗客は大低降りて行つた。要吉それでも立たうともせぬ朋子は少し腰を浮かして、小聲に、

『あの、此處ぢやありませんか』と注意した。

それに返をしないで、要吉は彌俯向いて仕舞つた、其内電車は

發車する。要吉は女の足袋の爪先を凝乎とみつめたまゝであつたが、此時の朋子の顔の表情が明々どみるやうな氣がした。

朋子は微かに溜息を洩した様であるが、又靜かに腰を下して身動きもしなくなつた。此僅少の時間に、二人の頭の中では、殆んど數へ切れない程の感想が稻妻のやうに通過した。間もなく電車は柏木を過ぎて、中野の終點に到着した乗客は皆降りた。二人も其後から續いて降りた。此時要吉は始めて朋子の顔を眞面にみた。

『眞鍋さん!』



「はあ」と極めて落着いた返辭をした。此女の落着く時は極めて心中の極めて動亂してゐる時である。

「私は貴方を欺いたのです、欺いてこゝまで連出したのです、それは折入つて聽いていた、きたいことがあつたからですが、若し私のしたことをお腹たちなら、何うぞ介はず此處からお歸り下さい。御遠慮には及びません。——それとも私の行く所まで一緒に來て下さいませるか」

要吉は一息斯う言つて女の顔を覗き込んだ。

「は、……伺ひませう」と、朋子は眼を伏せたまま答へた「え

きて下さる」要吉は人目さへなけりや其處へ跪きたいやうな氣がした「實は何處へ行かうといふ宛もない。唯此處まで來たけです。兎角柵外へ出ませうか」

朋子は頷頭いた。

二人は乗越した分の賃錢を拂つて停車場を出た。線路に沿ふて少し行くと踏切がある。それを横切ると、一面に畑が開けて、青い麥が五六寸程のびて居る。夜上りの雨で土は黒く濕つてゐるが、空氣は清く澄んで、小春日和の暖かさに、草木の液を吹上げる音も聞へさうである。要吉はうつとりとして、初戀をし



てゐるやうな心持になつた、女と同じ暖い日光を浴びて同じ澄んだ空気を呼吸して、人目の少ない、圃道を並んで行く、袂がすれたり、肩が當つたりする度に、要吉の胸は遠潮の寄せてくるやうに溫柔の情にゆらいだ。

やがて路が兩方に岐れてゐる所迄來ると、要吉は急に首を傾けて、

「新井の薬師は確か此道を行つたやうに覺えてゐるが、あなたはいらしたことがありませんか」

「ずつと以前祖母と一緒に參つたことがあります、最う六七年

にもなりますから判然おぼへてはゐませんが。屹度此方でございましたらう」

「お祖母さんがお在なさるのですか」

「え、始終眼が悪いのですから薬師様へおまゐりすること云つて、私を連れてきたのです」

要吉は頭を圓めて品の好いお婆様が孫娘に勞はられて、薬師へ參る姿を眼浮べてみた。それは自分の記憶に残つてゐる二十年前に死んだ祖母が、いつも坊主で居たから左様思つたので、東京には滅多に頭を圓めた年寄はない事を思ひ出して、直に切髪



にして見やうかとしたが如何しても、眼に浮ばなかつた。

「屹度善い年寄りでせう」

「家のものは皆善人です、唯私だけが不善ない」

要吉は振返つた。

「何故不善いのです」

「何故でも不善いのです」

二人は顔見合せて笑つたが、要吉は急に堅くなつた。眞面目な家庭に生れて、暖い良親の中に育つた朋子は、自分とはどうしても近寄り難い他人の様に思はれたからである。

路傍の茶の木に浴ふて曲ると、急に道幅がひろくなつて、雑木林の間から薬師堂の瓦屋根がみそだした、掛茶屋の軒から一本の棹を出して、種々な講中の名、茜色や紺に染めぬいた小旗が幾つも釣してある。そこを通りぬけて、山門をくぐると、舗石の上に鳩が群をなしてゐた。それが人の足音をきいて、ばつと立つ。中には屋根の上に舞ひ上るのもあつた。鰐口の綱にすがつて、御堂の奥を覗き込むと、薬師の尊体は油煙に煤びてよくも拜まれないが、列をなして蠟燭の裸火が風にまたくと、香の煙が蛇のやうにうねつて空へ上る、御堂の上では一刷毛の白



い雲がみだれて蒼空の底へ吸ひ込まれるやうに消えた。  
 二人は踵を廻らした。手洗水の側に、眼の爛れた小さい婆さんが、鳩にやる豆を小皿に載せて賣つてゐる。要吉はその皿を取つて二三杯舗石の上にはらまいた。朋子は足許へ鳩が寄て來るので動くこともならず。そこに立縮みになつた。逆上せる程の日光を眞面に浴びてうつとりと鳩が豆を拾ふさまを眺めてゐる眼が滲むで、唇の色が際立つて紅い、今にもその場へ崩折れさうな、要吉は手を出して扶けやうとして、僅かに控えた、良あつて鳩が向ふへ去るのをみて、朋子は徐かに歩を移した、要吉

も並んで歩く様にして、  
 『何處かお加減が悪いのですか』  
 『いゝえ、そんな容子に見へますでせうか』と遽て、顔を擧げた。  
 『別に左様といふ譯でもないが、何なら一寸向うの家で休んでゆきませうか』  
 『先生はおつかれになりました？』  
 要吉は返辭をしないで、先づ茶屋の軒をくづつたが、そこはあまり往來から見えずくので、庭の枝折戸をあけさせて、裏座敷